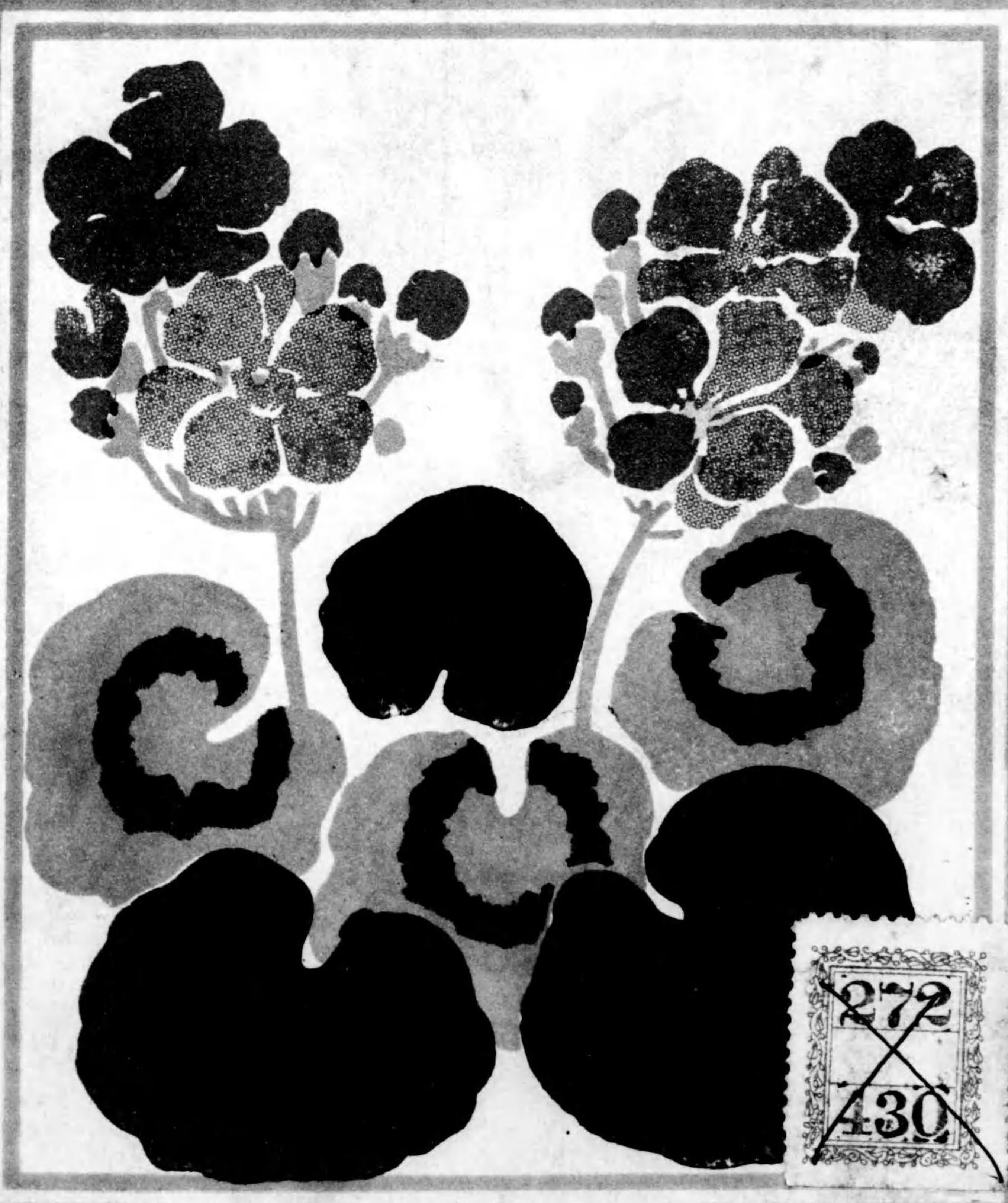


トエ|J-11

# 寮の舎花

笠峰 著 耕花 畫



博文館藏版

0m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>19m</sup> 1 2 3 4 5

# 始



15-11

特106  
1758



沼田笠峰著

寮  
舎  
の  
花

東京  
博文館藏版







はしがき

注意ぶかい母親は、小さな玩具を子供に與へるにしても、その年齢によつて種々の異なつたものを要するといふことを忘れないでせう。

これと同じやうに、一概に子供の讀みものと言つても、お伽噺、寓話、冒険談、歴史談、小説など、さまざまの種類がありますから、子供の年齢と境遇によつて、その材料や性質の違つたものを選ばなければなりません。殊に少年と少女とは、先天的に氣質や感情が違つて

居りますから、年齢の長ずるに従つて、読みものゝ内容も著しく異ならざるを得ないのであります。

こゝに公にした『寮舎の花』は、上に述べたやうな見地から、主として十三四歳乃至十六七歳の少女に讀ませるために筆を染めたのであります。蓋し、この年頃の少女は、感情が鋭敏にはたらくと同時に、やゝ實際生活に觸れようとして居りますから、あまりに子供らしいお伽噺では、もはや満足しなくなります。さりとして、徒らに彼等の纖弱な感情をそゝるやうな讀みものでは、

教育上、厭ふべき影響を及ぼしはしないかと危ぶまれます。それで、彼等の美しい經驗から想像して、實際にあり得るやうな事柄で、而もその柔らかな心に善い感じを與へる趣味深い物語が、最もふさはしいのではな

いかと思はれます。この書は、殊更に珍奇な材料を取扱つたのでもなければ、また讀者の感情を刺激して興味を誇張しようとしたのでもありません。たゞ少女の學校生活に經驗し得るやうな普通の出來事を、小説風に書いて見たま

でもあります。従つてこれを読む少女に幾分でも清  
い柔らかな感じを與へることが出来れば著者の目的  
は十分に達せられるのであります。

この書の材料や會話については、村岡たま子女史の  
助言を得た所が少なくありません。こゝに記して同  
女史に感謝の意を表します。

大正二年正月

少女世界編輯局にて

沼田笠峰

# 寮舎の花 目次

第一	應接室	一
第二	ながい廊下	八
第三	寮の姉様	一五
第四	寮舎の夕	二七
第五	ほゝゑみ	三二
第六	藤棚の下	三五
第七	テニスコート	五〇
第八	ベン皿	六二
第九	和歌の浦波	七二

目次



寮舎の花

第一〇 鬼ごっこ……………八五

第一一 ポプラの蔭……………九四

第一二 國語の時間……………一〇二

第一三 輝く夕日……………一〇七

第一四 教室の入口……………一一二

第一五 植物園……………一一七

第一六 懐かしい思ひ出……………一二五

第一七 なぐさめ……………一四三

第一八 雪國の話……………一五〇

第一九 山茶花散る日……………一六一

第二〇 郷里の友より……………一六八



目次終

目次

第二一 その前夜……………一七四

第二二 文藝會……………一八二

第二三 夢の曲……………一九三

第二四 わかれの宵……………二〇七

第二五 最後の勝利……………二一八

附録

鄙の花……………二二三



# 寮舎の花

## 第一應接室

沼田笠峰著

美代子はお父様の後について、厳めしい校門を入りました。まばらに植ゑられた落葉樹を左右に見ながら、白い小砂をザク／＼と踏んで玄關の石段に足をかけた時、嬉しさと不安さとに胸の躍るのを覚えました。

玄關の左手の少し離れた所にある二階の教室からは、低いオルガ



ンの音が聞えて来るし、どこか遠くの方では、聞き分けがたいほどの讀書の聲がして居ました。美代子は聞き耳を立て、その遠くの物音を追ふやうな気分になりました。お父様はそんなことには頓着せず、ツカ／＼と石段を上つて呼鈴を押しました。

取次ぎに出て来たのは四十格好の中婆さん。子供のやうに薄よごれた前掛の端を掴みながら、

『どなたでございます？』

『和歌山から来た京極といふものでございりますが、あのう、山岡先生にお目にかゝりたいので。』

『校長さんにですか。』

『はい、手紙でお願い申してありますから、和歌山の京極だと言つ

て下されば解る筈ですが。』

『ぢやア少々お待ち下さいまし。』  
と、姿をかくしました。

お父様は帽子を片手に持たたまゝ、今引き返してゆく小使の後姿を無意味に見送つてゐるし、美代子はまた見送つて居る人の後に無言で差控へました。やゝ暫らくすると、以前の小使が現はれて、  
『お待ちせ致しました、どうぞ此方へ！』

と、はじめよりも叮嚀な口の利き方をしました。

お父様と美代子とは小使に導かれて、真直な廊下の突當りから左に折れて、二階の應接室に参りました。南と西とに日を受けた明るい應接室には、花模様の絨氈を敷きつめて、中央に置かれた圓い卓

子の周囲に、四五脚の籐椅子が並べてありました。

『こちらで少々お待ち下さいまし。』

斯う言つて小使が出て行つた後で、美代子はキヨロ／＼した眼附で室内を見まはしました。窓際の飾り棚においてある金文字入りの書物や、その上の花瓶に挿してある美しい草花や、反対の壁に掛けられた水彩畫の額などが、美代子の眼になつかしう映りました。お父様は部屋中をすつと見まはしてから、

『美代、立派な學校ぢやなあ。』

と、思ひ出したやうに重々しい詞子で口を切りました。

『え、この敷物が綺麗ですわ。』

と、美代子は俯いて自分の靴の泥を気にしました。どこからともな



く、オルガンの音に交つて一種ゆるやかな響がきこえて來ます。室内では父子思ひの心で沈黙を續けました。

やがて軽い足音が入口で止まつたかと思ふと、扉をあけて山岡先生が血色の好い顔をお見せになりました。頭は無造作な束髪にして、黒の紋羽二重の被布を召した山岡先生は、見るからに上品で懐かしい感じがしました。

『どうもお待たせ致しました……。』

『これはまあ先生……。』

先生とお父様との慇懃な挨拶があるので、美代子は椅子を離れて立ち上つたまゝ、手持無沙汰で傍に控へてゐました。

『田舎者でなんにも存じませんでございませうから、何分どうぞ宜し

くお願い申します。』

と、お父様は頭を下げて美代子のことを何くれとなく頼みました。

山岡先生は始終にこやかな態度で應接しながら、お父様の口から美代子といふ言葉が出る毎に、美代子の俯きがちな様子を御覽になつてゐました。

『それでは寄宿舎の方へ御案内致しますから、あなたも一寸御一所にお出で下さいませうか。』

『はあ、どうぞそれでは……。』

と言ひながら、お父様は美代子に目くばせして、また先生の方に向ひ、

『先生は御用がお有りになるんぢやございませんか。』

「いゝえ、私はもう好いんでございます。朝の授業だけなのでございますから。」

斯う言つて先生はお立上りになりました。美代子は軽く會釋して、先生とお父様とについて室を出ました。

第二 ながい廊下

「吉野さん、吉野さん、いらつしやいますか。」

同じやうな部屋がならんでゐる長い廊下を通つて、一番奥から二番目の入口の前で、山岡先生は斯う聲をかけました。

はいと答へて、室内でしとやかな足音がしたかと思ふと、中から

入口の扉が開かれました。美代子は入口から少し離れて、後の方に佇んでゐましたけれど、自分よりはすつと身體の大きい、目のぱつちりとした、荒い矢飛白の羽織を着た一少女の姿が目につきました。その少女は恭しく一禮して、何か先生の仰せを待つやうな表情をされました。

「このお方ですがね、一昨日お話ししましたでせう、今度入舎なさるつて仰有るんですよ、今日からでも差支ありませんね。」

「はあ、どうぞ！」

「それでは京極さん、このお方と御一しよにいらつしやるやうになつて居りますから……吉野さん、この方が京極さん。」  
と、先生は向き直つて二人を紹介しました。お父様は、

「不束な娘でございますから、何分どうぞ宜しくお願い申します。これ美代や、御挨拶を申し上げて、よく何かを教へて頂かなければならないよ。」

美代子は顔を赧らめて、聞き取れぬほどの聲で吉野さんに挨拶をしました。先生は室内に入つて、机の置き場所や押入のことなどを吉野さんと打ち合せながら、

「お荷物はどう参つて居るのでございますか。」と、尋ねました。

「はい、宿まで持つて来て居りますから、私が歸りましてから、すぐ今日中にこちらへ届けるやうに致します。」

「あゝさう、それぢやアお荷物が参りましたら、よく吉野さんと御

相談なすつて、ね。穿物やなんかはまた別に置き場所が定まつて居りますから。」

と、今度は美代子の方を顧みて、山岡先生が言ひました。

「はい、有難うございます。よく教へて頂きました。」

と、お父様が代つて答へて下さるので、美代子はたいお辭儀ばかり繰返しました。

「斯うしてお願ひ致しましたら、私はもうお暇申します。どうぞ先生、何分とも宜しくお願ひ致します。」

「まあ宜しいぢやございませぬか、あちらの應接でお話下さつても宜しいのですから、どうぞまあ御ゆつくり遊ばして。」

「はい、いえもう斯うしてお願ひ申してさへ置きますれば、私はま

だ外に少々用向もございますから、誠に失禮でございますが、これでお暇致します。」

「左様でございますか。それでは美代子さんのことは決して御心配に及びませんから、はじめはお寂しくても、すぐお友だちが出来ま

すから。」

「はあ、もうこれで安心致しましてでございます。それに斯うして、大きいお方と御一所に置いて頂きますれば、何かと都合が宜しうございますから。……どうぞあなたも、よろしく願ひ致します。」

と、お父様は吉野さんに向つても、宜しく願ひ致しますを繰返しました。而して今度は美代子の方に向ひ、

「それでは美代、荷物はすぐ俵で届けるから、ね、もし何か不足な

ものがあつたら、先生に願ひして買つて頂いても好いし、送られるものは送つてやるから、手紙でさう言つておよこし！ ね、おきに皆さんとお馴染になるぢや。だからよく勉強しなくちやならないよ。」

美代子は斯う言はれて、さすがに胸が一ぱいになりました。にじみ出さうな涙を、先生や吉野さんに見られまいと、おつと堪へてゐましたけれど、お父様の顔を見上げることも聲を出して返事をする

ことも出来ませんでした。

山岡先生を先に、お父様と美代子とは並んで長い廊下をあるきま

した。吉野さんも一間ほど離れて、その後からついて来ました。本校の方では、ちやうど授業のはじまる鐘が鳴つた時で、そこの廊

下や軒下に遊んでゐた生徒が三々五々、あわたしげに靴音を立てて教室の方へ駆けて行きました。美代子はそんなことに氣を取られながらも、今お父様と別れるわびしさを思ひ浮べて、俯きがちに小刻みな足を運ばせました。

『もう別に用事はないだらうね、お父様は今晩一寸本郷まで行つて、明日の汽車で歸る。本郷の方へもよく頼んではおくけれど、何か用事のある時には、先生に願ひすると好いよ。……まあ身體さへ丈夫なら心配することはない、氣をつけてね。』

と、廊下をあるきながらも、お父様は小聲で美代子に言ひきかせました。

玄関の外に立つてから、お父様はまた山岡先生や吉野さんに『ど

うぞ宜しく願ひ申します』を繰返して、別れを告げました。美代子はわざと見ないやうにして居りましたけれど、ザク／＼と庭の小砂を踏む音が耳に入ると、何だか身内がぞつとするやうに覺えて、われ知らずお父様の後姿に目をつけました。後をも見ずに出て行くお父様の影が、校門の黒い柱に遮られて見えなくなつた時、美代子の眼からポタリと一滴熱い涙が落ちました。

### 第三 寮の姉様

お父様を見送つてから、美代子は吉野さんと一しよに、定められた室に歸りました。

寮舎は三棟にわかれ、松、竹、梅と名がついてゐました。美代子の室は梅の第二號、小ざつぱりとした南向きの六疊で、庭に面した方には樽ガラスの障子が建てられてありました。美代子は入口のところ、小ざつぱり坐つて、落着かぬ心もちで室内を見まはしました。三尺の床の間には、讀みにくい字の軸が掛けられて、その前に竹細工の書棚が横むきにおいてありますし、書板や雑記帳のやうなものも、キチンと積みかさねてありました。赤味を帯びた床柱の花籠に、白薔薇と勿忘草との造花が無造作に挿してあるのも、ゆかしう思はれました。

「机の置き場所を換へなくちやならないけれど、あなたのお荷物が来てからにしませうね。」

吉野さんは斯う言つて、美代子の方へ向き直りながら、

「何をそんなに考へてらつしやるの、お寂しいんですか。心配しないで、ちきお友だちが出来ますから、ね。」

と言つて、につこり笑つて見せました。美代子は、はじめて吉野さんを見た時から、その眼もとや口もとが郷里の小學校の唱歌の先生に似て居るやうな氣がして、慕はしくてなりませんでした。けれども、まだ此方から口を切つてお話するほどの強い心になれないので、たい懐かしさを現はすために、笑顔で軽く應へました。すると吉野さんは、

「この寮舎は割合に自由ですから、お馴染が出来たら面白くなりますわ。あなたまた寮舎生活は始めていせう。」



「え、何處へも行つたことないんですの。」

「寄宿舎は面白いんですよ、晩の御飯の後なんか、みんなで一しよに騒ぐんですもの。それに娯樂會や文學會や、いろんな會がありますから。あなた文學お好き？」

「え、文學ツてまだなんにも知らないんですけれど、好きは好きですわ。」

「さう、雑誌なんかお読みになるでせう。」

「え、読むことは大好きです。」

「寄宿舎で時々朗讀會を開くんですよ、そりやア面白いの。それからテニス會だの獨唱會だのつて、ほんとに忙しいほどいろんな會があるんですよ。今日も木曜だから、竹の寮では談話會があるんです

つて。」

と、説明してくれるのを、美代子は豫て想像してゐたことが今眼の前に現はれたやうに、胸躍らせながら聞いてゐました。

「あ、さう、お荷物が来るまでに、あなたに食堂や湯殿を教へてあげませう、ね、いらっしやいな。」

と、吉野さんは立つて促しました。

美代子はまた吉野さんに連れられて、食堂、娯樂室、圖書室、集會室、湯殿、化粧室、洗濯場、通用口など、残る隈なく見まはりしました。而して、何から何までよく整つてゐるのに感心しました。

「穿物は此處に置くんですよ、これがあなたの所、あとで札を貼つときませうね。こゝから廊下を通つて、本校の方へ行けるんです。」

解つたでせう。』

と、吉野さんは深切に教へました。

『まだ三時にならないのか知ら？……一寸學校の方へも行つて見ませうか。あなたもう學校の方へは行らしつて？』

『いゝえ、まだ……山岡先生が明日からだつて仰ツしやいました。』

『さう、ちやア一寸行つて見ませうよ、様子が解らないといけないから。』

斯う言つて吉野さんは、通用口から中庭へ出ました、美代子は嬉しくもあるし、先生の許可を得ずに行つて叱られやしないかといふ不安もあるし、何だか一種言ひがたい心を抱いて、吉野さんの後に續きました。

名も知らぬ草花の咲き亂れた花壇を右に見ながら、芝生の間に曲りなりにつけられた徑を通つて、本校の生徒昇降口に出た時、いよいよ自分はこの學校の生徒であるといふ強い誇りを感じました。

學校の内部は外から見ただよりも廣くて、寄宿舎以上によく整つてゐました。同じやうな廊下や教室が幾通りも列んでゐるので、美代子は一々覺えることも出来ない位でした。立ち留まつて見たい所や、のぞいて見たい室があつても、吉野さんの姿を見失つてはならないと思ふので、次から次へとあわたいしく見て行きました。

『あなた三年にお入りになるんでしたわねえ。』

『えゝ。』

『ちやア此處ですよ。どの組か解りませんけれど、この兩側が三年

ですから、明日からは此處へいらッしやるんですよ。』と教へられて、美代子は今さらのやうに胸の躍るのを感じました。『こゝが三年、二階が二年、四年は向ふ側で、五年はすぐこの後の二階なのよ、一年は今通つて来たでせう。』と言はれても、美代子はそれが何年の教室であつたのか、一向記憶に残つてはゐませんでした。

と、遠くの廊下でチャン／＼と鐘が鳴り出しました。今まで静かであつた左右の教室で、何の音ともなくザワ／＼と騒がしい音が起りはじめました。やがて二階から降りて来る生徒、次の教室から出て来る生徒、靴の音、机を動かす音、それからそれへと續いて、生徒はゾロ／＼と校外に出て行きます。美代子は吉野さんの陰にかく

れるやうにして、見知らぬ生徒のハイカラな様子や、氣取つた態度を見てゐました。

『あら吉野さん、あなた今日お休みになつたのね、西洋史が面白かつてよ。』

と、廊下で吉野さんに聲をかけてゆく生徒もあるし、美代子の顔がいぶかしさうに見て行くものもありました。

『吉野さん、だあれ？』

と、今し二階から降りて来たローマの少女が聲をかけました。

『この方？はじめてなのよ、京極さんて言ふの。』

『京極さん。……寮舎へいらしたの？さう、可愛い方ね。』

と、その少女はチラと美代子の顔を見ながら、吉野さんに寄り添う

てあるきましました。茶色のリボンを後髪の所に幅ひろくつけて、スラリとした姿に蹠の高い靴をはいた様子は、何となく垢抜けがして人を引きつける力があるので、美代子はちつとその後姿を見ながら、和歌山の學生風俗とは、天地の差違があると思ひました。

「ぢやア貴女のお部屋は賑やかになるのね。」

「え、私また竹の寮へやられるかと思つて心配してゐたの。この方が来て下すつたから、ほんとによかつたわ。」

「以前あなた竹の寮にいらしたの？」

「さうよ。竹の寮は何だか空気が湿ッぽいのよ。私やつぱり梅が好いわ。」

「オホ、色をも香をもでせう。」



「あら、あんなこと……だつて知らない人は知らないわ。」

「さうね、貴女のことですもの。」

「貴女のことツてなあに？」

「知らないわ私も。知る人ぞ知るでせう。」

「何のこと言つてらッしやるの、ちつとも解らないわ。」

「好いよ解らなくても……今日の西洋史面白かつてよ。」

「さうですツてね、随分進んだでせう、あとで筆記帳貸して頂戴ね。」

「筆記帳は駄目なの。吉川先生もう夢中になつて、お話ばかりしていらッしやるんですもの。」

「さう、聞きたかつたわ。」

吉野さんとローマの一生徒とは、こんな話をしながら、寄宿舎へ

の別れ路まで来ました。美代子は何のことか解らないので、無言のまま、その後について歩きました。籠から放たれた小鳥のやうに、靴音軽やかに三々五々連れ立って校門へと急ぐ生徒が、吉野さんたちとにつこり笑顔を交はして、その度に美代子の顔を見い／＼するの  
で、美代子は恥かしさうに俯いてゐました。

「ちやア左様なら。」

と、ローマの生徒が別れを告げると、吉野さんも「左様なら」と會  
釋して、今度は美代子の方に向ひ、

「もう歸りませうね。」

と、顔を覗くやうにしました。

#### 第四 寮舎の夕

「京極さんと仰ツしやるのは此方ですか、お荷物が參つて居ります  
よ。」

と、小使が扉口に佇んで知らせました。

美代子は吉野さんと一しよに、玄關まで行つて見ました。二臺の  
俵で運ばれた荷物は、もう玄關の上り口に積んでありました。吉野  
さんは先に立つて、車夫や小使に指圖しながら、机、柳行李、夜具  
蒲團など、それ／＼自分の部屋へ持ち込ませました。而して机は南  
側の障子際に据ゑ、行李や衣類は押入に入れて、  
「さあ、これで片づきました。これならもう美代子さんのお座敷ッ

ていふ氣がするでせう。』

と、冗談らしう言つてほゝゑみました。實際のところ、美代子は自分の荷物が着いたので、しつくりと落着いた心もちになりました。

その晩、食堂で美代子は寄宿生一同に紹介されました。生れて始めて寄宿舎の御飯をたべる美代子は、何だかそわ／＼して、喰べない中からお腹が一ぱいになつてゐました。けれども美代子は、氣が小さくて些細なことにも恥かしがりをする割合に、どこか開放的な愛嬌に富んだ優しい少女でしたから、見知らぬ人々ともだん／＼に打ち解けて、田舎訛りを氣にしながらも、その日の中からも隣席のお友だちと口を利くやうになりました。

食後、吉野さんは竹の寮の談話會に招かれて行きました。美代子

は机の前に坐つて、しばらくは考へるともなくインキ壺や毛絲の脇つきに眼を注いでゐましたが、やがて立上つて柳行李の荷物を整理しました。それからまた机の前に坐り直して、硯箱を引き寄せました。先づ第一にお母様への手紙を書いて、次には郷里で仲のよかつた玉子さんに長い手紙をかきました。

『玉子さん、私はとう／＼寮舎の少女となりました。お別れする時は、ほんとに悲しかつたわねえ、あの時のことを思ひ出すと、あんまり泣いたのでキマリが悪くなりますわ、でも私、やつぱり悲しいのよ、もう當分お目にかゝれないんですもの。』

今夜は誰も知つたお友だちのない所で、この手紙を書いて居りますの。私は吉野さんといふ深切なお姉様と一緒に居るのですけ

れど、そのお姉様は今別の寮舎の談話會に行つてらッしやるから、私は一人ぼつち！故郷のことが思ひ出されてなりませぬわ。

玉子さん、私は寮の少女になつても、まだ何も解らないの、やつぱり和歌山の學校が戀しいわ。東京へ行つたら、あれもこれもと、あんなに楽しみにして、貴女や光子さんに羨ましがられたけれど、来て見ると狐につまゝれたやうで、私どうして好いか解らないの。それにお友だちがないんですもの、そりやア寂しいわ。

でも私、あんまり悲觀はしないつもりよ。一生懸命になつて勉強するわ、だから安心して頂戴よ、和歌山の名譽を傷つけるやうなことはしないつもりよ、オホ、随分私生意氣でせう。だつて寂しい中にも、何となく嬉しい氣がするんですもの。

學校へは明日から行くの、今日一寸吉野さんに連れて行つて頂いて、教室を見て来ましたの、ハイカラな生徒が居るのに吃驚しましたわ。そら、いつかの雑誌の口繪を見て、あなたと私とで好いスタイルだつて言つたことがあるでせう、あんなスタイルの生徒ばかりなの。私のやうな田舎者は、どうしたら好いかと思つて恥かしくなつてよ。でも私、あなたが仰ツしやつたやうに、そんなにハイカラにはならないつもりだから大丈夫、オホ、今からもうさう言つておきますわ。

玉子さん、和歌山のたよりをまた聞かせて頂戴ね。私も學校へ行つて、いろんなことが解るやうになつたら、また委しくお知らせしますわ。光子さんや袖子さんによろしく言つて頂戴な！では

左様なら。

梅の寮二號室にて

美代子

斯う書いて美代子は、またはじめから読み直して見ました。今日入舎したばかりで、何の知らせることもなく、まとまつた印象とてもないので、何となく物足りない手紙だと思ひましたけれど、これ以上書き添へる材料はありませんでした。

第五 ほゝゑみ

美代子はなじむに従つて、學校でも寄宿舎でも皆に可愛がられました。いつも謙遜な態度で、つゝましやかにして居りますけれど、

その素直なしをらしい様子が可愛いといふので、上級の生徒たちは廊下や運動場で顔見合はせる毎に、につこりと笑つて迎へるといふ風でした。

けれども美代子は、どこか意地の強い氣象があつて、一旦斯うと思ひ込んだら、誰に何と言はれても、だまつて我慢するといふ風でしたから、同級生の中には、内々美代子を憎んでゐるものもありました。それに負けることの嫌ひな美代子は、田舎者といはれたくなさに、言葉や行ひにも随分氣をつけますし、また學科も一生懸命に勉強しましたから、陽は皆にやさしくされても、陰では嫉みを受け

ることもありましたが、郷里にゐる時分、美代子は東京とさへ言へば、きれいな美しい人



ばかりのゐる所で、どの學校にも華やかな気分が充ち満ちてゐると思ひました。

「東京へさへ行つたら……あの名高い學校へ轉學することが出来たら……。」

と、こんなことを幾度考へたか解りません。而して、今その望みに望んだ東京へ来て、人も羨む寮舎生活をする身になつたと思ふと、われ知らず胸に熱い血潮が漂ふやうな氣がして、忍ぶとすれど軽い微笑の浮ぶのを禁じ得ませんでした。

「あら、何か嬉しいことがあるんですか、たつた今まで寂しさうに鬱いでいらしたのに。」

と、吉野さんに言はれて、今まで包んでゐた嬉しさを誘ひ出された

やうに、

「何でもないんですの、オホ、々々。」

と、俯きがちに笑ひを漏らすことも度々ありました。

斯うして美代子の新らしい學校生活、珍らしい寮舎生活は、希望と平和とに満たされてゐました。一生懸命に勉強して——といふ勇みの心は、たえず美代子の胸に通つてゐました。

### 第六 藤棚の下

竹の寮に居る井上君子といふのは、美代子と同じ級で一番の勢力家でした。面長の色が白くて、ちよいと眼に險がありますけれども、

家が財産家なので、いつも好い服装ばかりして居ましたから、美人だといふ評判が高いのでした。その上お父様が醫學博士なので、先生までが一目おいてゐるものですから、君子はそれに慢心して、他の生徒を壓迫するやうな行が時折ないでもありません。學科の出来ない少女、家の貧しい生徒など、心の中では口惜しいと思つて居ても、皆涙を呑んでさりげない顔をして居ります。

美代子は、はじめて學校へ出た日に、皆の華美な服装や、快活な會話ぶりに目をみはつて、都會の少女といふものと自分の間には、よほどの懸隔があるやうに思ひましたが、十日十五日と教室へ出る度數が重なるにつれて、都會の女學生だつて、さうく出来る人ばかりではないといふ事が解りました。

故郷の學校では優等で通して來た美代子のことですもの、玉子への手紙にも決して和歌山の名を恥かしめなかつてもりよと書いた位ですから、よくある借りて來た猫のやうな態度はしたことがありません。先生の御質問にも、はにかまずにハキ／＼とお答へしました。それに、美人といふ程ではありませんけれども、いつもほゝるみをたくはへた口許、夢みるやうなおつとりしたまなざし、濃いふつさりした髪を、前がみのたつたお下髪にして、折目正しく袴を穿いてゐる美代子の姿には、何處か犯しがたい品位と、たとへやうもない可愛さがこもつて居りました。

「ね、こんどいらした京極さんて方、よく御出來なさるわね。」  
「ほんとうにね、私田舎にもあんな方がいらつしやるのかと思ふと、

恥かしいやうな気がしてよ。」

「私だつてもよ。それにお服装だつてちつとも田舎らしくはないんですもの。」

「然うよ、何處か斯うお品があつて……あのいつも茶色のリボンをかけていらつしやるでせう、あれが耐らなくいゝわ。」

など、廊下のはし、運動場の隅で、噂も出るやうになりました。

上級生はまた上級生で、

「三年のA組には可愛い人が入學つたわねえ。」

「え、和歌山からいらしたんですつて、よくお出来なさるさう

よ、そりやアいゝお聲で、獨唱などなさるのをちつときいてゐると、涙がこぼれさうですつて。」

「和歌山！南國の暖かいやはらかい気分のがれて居る處ね、私あの人の心も屹度明るいだらうと思つてよ。」

「活きくした表情ね、南國の少女！」

「鳩のやうな眼を持つて居るわ。」

「まつたく明るい気分の人ね、ほんとうに可愛い人。」

「梅の寮でね、吉野さんとおなじお室ですつて。」

「まあ、私吉野さんが羨ましい。」

こんな會話は自然と君子の耳にも入りました。さうときいた君子の胸は、波立たすにはゐられません、先生までがこの頃は、美代子さん美代子さんと仰有るやうになつたと思ふと、今まで自分が占めて居た位置を、ともすれば追ひ抜かれさうな気がして、口惜しくつ

て耐りません、自分の足らぬところには気がつかず、ひたすらに美代子を憎んで、事あらば陥れやうと、怖しいことを考へないでもありませんでした。

それにまた数多い生徒の中には、やはり君子と同じ心持ちで居る人もありました。何だ、あんな田舎もの、すこしばかり出来ると思つて、いやに澄ましてゐる。——こんなことを思つてゐるものもありました。

『あなた方どうお思ひなすつて、美代子さんのこと。』

中庭の藤棚の下、黄いのがまざりかけた芝生の上に、フランス形のハイカラな靴を投げ出して、思ひくくにすわつた五六人の同志を見廻しながら、ちよつと女王といったやうな態度で、君子がいひ

だしました。すると言下に、

『大きらひ。生意氣だつてありやしないわ。』

と、投げるやうにいつて退けたのは、あらい紫矢飛白を着た芳子でした。

『ほんとうによ、田舎もの、癖してね、先生のお氣に入りだと思つて……先刻の時間も、そら、さもうまいだらうつていふやうな顔して、作文をよみあげたわねえ——逝く秋——なんていやに氣取つた細い聲だして。』

『さうしてぐつとかう胸をそらして、威張つて歩くわ、姿勢がいゝなんて體操の先生がほめるもんだから、いゝ氣になつて、自分ほど豪いものはないつていふやうな態度をしてゐるわ。』

美代子のお父様は、謠がお上手なので、ちひさい時から仕舞を習はせられた美代子の態度は、ほんとうに落着いて居りました。

『そんな悪口はいふもんぢやないわ、だけれどもねえ』

と、君子は、濃い海老茶袴の紐にからませた細い銀ぐさりをまさぐりながら、

『私は恥だと思ふの、和歌山つていへば蜜柑の樹ばかりある田舎でせう、そんな田舎から出て来た人に負けるなんて——私達は東京で

生れて、東京で育つた人ぢやありませんか、あんな、あんな……』

美しい眉をひくくさせて、きつとテニスコートの方へ眼を据ゑました。其處にはラケットを手にして、裳輕うひるがへした美代子の姿が、丁度春の野に戯むる、胡蝶のやうに、たのしげに見られま

した。

『さうよ、さうよ、ほんとにあんな人に負けちやあ江戸ツ子の恥だわ、紀州の山猿なんか。』

と、芳子は妙なところで江戸ツ子をふりまはします。

『ちよいと憎らしいわねえ、吉田先生とまたテニスよ。』

『どれ？ あらほんとにねえ、あの先生はこの頃美代子さんとばかりなさることよ、どんなにお可愛いでせう、ほゝゝ。』

『先生も先生よ、ねえ、以前はちつともなさらなかったのに。』

『お花なんですもの。あのね、美代子さんは獨唱家だつて仰有つたんですつて。』

『まあ！ あんな聲、ちつともよかあないぢやありませんか。』

前髪を真中からわけて、髪を下の方で束ねて、焦茶のお袴を穿いた吉田先生は、まだお若くつてお美しくつて、それに音楽の専任ですから、誰も誰もなつかしがつて居ります。いま、美代子とテニスしていらつしやるのを見て羨ましく思つたのは、この連中だけではなかつたでせう、けれどもこの人達ほどに妬ましく思つた人は、おそらく一人もありません。更に君子の心の中は、芳子たちよりもなほ且つ淺ましく燃えたにちがひありません。然し、さすがにみんなのやうな、はしたないことは口に出さず、たゞふゝむと鼻の先で嘲笑つたばかり。

「お天氣のいゝうちに、また何處かへ行かなくつて。」と、話題をかへました。

「えゝ行きませう、何處、大森？ 川崎？」

「平凡だわ。それよりも汽車に乗つて行くところ。」

「ぢやあ鎌倉、逗子。」

「そんな遠い處は私いやよ、品川の妙華園あたりぢや駄目？ 秋草はもういけないけど、静かでないでせうと思ひますわ。」

「それもいゝわね。けれども私は郊外でなく、小石川の植物園へ行きたいと思ふの、落葉の音をきながら、しみじみ語るなんて詩的だと思はない？」

君子のいふことに、異論のあらう筈はありません。

「いゝわ、いゝわ、大賛成よ私。」

「私も。植物園はいゝことね、まつたく。」

「それで、何日ごろ？」

「この次ぎの日曜あたりがい、んぢやなくつて、ねえ君子さん。」

その時、ベルの音が響き渡つて、永い晝休みの終りを告げました。  
「あら！ もうベルが鳴つた。」

「すつかり話しこんぢまつたわね、知らない中に時間が経つたわ。」  
「今のお話は、この次ぎのお休み時間に決めてしまひませうねえ。」

「ちやあ。」

と、君子が立ち上ると、皆もそれにつれてゾロ／＼と、教室さして歩を運ばせました。と、其處へ、薔薇色の頬にはほつれ毛の三筋五筋ハラ／＼させて、邪氣ない笑を浮べた美代子が驅けて来て、はたと君子等と逢ひました。

「ま、何處にいらしつて、私随分お捜しつてよ。」

と、人なつこく呼びかけましたが、みんなは顔見合せて冷たい表情をしたきり、誰も何とも答へません。けれども美代子はそんなことには氣もつかず、

「私はねえ、テニスをして居ましたのよ、吉田先生はほんとにお上手ねえ、でもあなたがいらつしやらなかつたんで、つまりませんでしたわ、明日こそは屹度遊ばせよ、ね。」

と、君子の顔をのぞきこむやうにしていひますと、  
「私なんて駄目ですわ、とてもお相手になれやしませんもの、ねえ皆さん。」

「え、え、美代子さんのやうにお出来なさる方は、この中にや

「一人も居りませんよ。」

「テニスばかりぢやあないわ、音楽だつて作文だつて、美代子さんが一番よ。」

「それも先生ののおひいきなんかぢやあないんですからねえ。」

「お豪いはねえ。」

「お爪の垢でも煎じてのみたい位よ。」

「おゝいやだ、私はそんなお出来遊ばすお方になんぞ、ならなくたつて澤山よ。」

「さうよ、出来ると兎角威張りたくなるものだから……私威張る人大きらひッ。」

「田舎出の人にきぎつて威張るんぢやないの。」

「澄ましてみたいんでせうよ、田舎ものはね。でも美代子さんはちがつてね。」

「お豪いんですもの、そりやア。」

美代子は何といつてよいかわかりませんでした、するどい針をさすやうな言葉が、美代子の胸にひしと喰ひいつて、いひ様もない冷たさを感じました。

「おそくなることよちよいと。何でもお出来遊ばす方は、すこし位おくれたつて、先生は何とも仰有らないでせうけれど、私達はちがひますものね、失禮してよ美代子さん。」

いひ捨て、芳子がバタ／＼とかけだしますと、  
「御免遊ばせ。」



と、言葉だけは淑やかに、君子も靴音かろく袴の裾をけつて行きま  
した。

『ほゝゝ、左様なら。』

『左様なら、美代子さん。』

わざとらしい笑をうかべて、みんなもその後を追ひました。ひと  
り取り残された美代子は、茫然としてポプラの樹蔭にたゝすみまし  
た。折からの風にヒラ／＼とちる病葉、その行衛を見つめつゝ、は  
じめて知つたかなしみに、美代子はホロリと落涙しました。

第七 テニスコート

——電光朝露の。影の内外に遊ぶ哉。胡蝶の舞の花の袖。あ  
はれなる心もて。花にと歌ひかなでん。げにや世の中に。獨と  
どまるものあらば。もし我かはと身をや頼まんと。げにことわ  
りや我ながら。只今別るべき。たらちをの亡き跡に。残らん事  
も幾程の。世に空蟬の唐衣。うすき契は親と子の。一世に限る  
夢の内を。思へたい朝顔の日影まつ間の花ざかり——  
——いつまでか長柄の橋のながらへて。かゝる浮世を渡らん  
と。思ふにつけても。恨めしきは命なり——  
あとを續けて口吟んで、美代子はまた涙ぐみました。風に送られ  
て、とぎれ／＼に聞ゆる鼓の音、謠の文句、その一調は美代子に  
一しほ物思はする籠祇王。

『お父様も今頃は、屹度なすつていらつしやる。千ちやんがああ、可愛いお手を袴の上へきつちりついて、きれいな聲を張りあげて教はつてゐるに違ひない、歸りたいわ私も。』

寮の小窓に身をよせて、とほく見上ぐる南の空、眼もはるくとコバルト色の末をみつめて、美代子はつくづくと懐郷のおもひに胸をいたくするのでした。東京の方はみんな優しいと思つたのは、束の間の夢でした。今日學校で君子等にされた仕打ち、美代子の胸はどんなに傷つけられたこととせう。

『恨まれるやうなことは一つもした覚えがないのだけれど……あゝ和歌山の人は、皆好い方ばかりだつたわ。玉子さん、桃代さん、袖子さん、ほんたうに親切にして下さつた。けれどけれど……げにや

世に住むは。うきこそまされ三吉野の——つて、ほんとうにさうだわ、いつもくく笑つて暮せるものと思つて居ては間違ひなのですもの、まだ私の修養が足りなかつたのだ。いくら悲しいといつたとして、祇王のやうに、親子のわかれなぞといふのぢやない、お友達に諷刺をいはれた位で、こんな事を思ふなんて、弱かつた、弱かつた、もうもう歸りたいなどは思ひますまい。』

十六の心にはさかしくも雄々しくも思ひかへして、その口許にはいつものやうにほゝゑみさへたゝへました。

『あの方々とだつて決して争ひますまい。どんなに誤解されたつて、誠心といふものは何日かは通る時があるんだから、私は強い子にならなくては……』

「美代子さん、何をみていらつしやるの。」

涼しい聲で呼びかけて、窓の下へスラリと立つたのは、思ひがけない君子でした。

「あら！ 君子さん。」

あまりの意外さに思はず聲を立てますと、君子は艶やかにほゝるんで、

「御免遊ばせ。吃驚なすつて美代子さん、私ね、實はお詫びに上りましたのよ、お晝のお休みには失禮いたしました、皆様が酷いことを仰有つて、私ハラ／＼いたしましたけれど、止める譯にもゆかずねえ、あなた氣をお悪くなすつたでせう、御免遊ばせよ、私までがあの方々と同じやうに思はれては、ほんとうに立つ瀬がありません

わ、失禮ですけれどもお恨みしてよ、ほゝゝゝ。」

と、さすがにうまいものです、蜜の陰にかくれた針をしらぬ美代子は、君子のやさしい言葉に心から喜びました。

「まあ君子さんそんな、私何とも思つて居やしませんわ。えゝ、ほんとは何とも思つては居りませんから、どうぞもうそんなこと仰有るのはお止し遊ばしてね、私ほんとうに氣にかけてなぞをりませんから。」

「うれしい。さうと伺つて、私やう／＼安心しましたわ、もうね、

氣が氣ぢやあなかつたんですよ——ねえあなた、いまお暇ならテニスなさいませんか？」

「えゝしますとも、私の寮の方は皆様外出なすつて、獨りぼつちで

淋しくてならなかつたところですよ。』

『おや、私の寮の方もですわ、私は土曜日毎に家へ歸りますから、ほかの日にはちつとも外出いたしませんの……ちやあ早くいらつしやいな。』

『すぐまゐりますわ。』

いそくと玄關へ降り立つて、編あげの紐結ぶ間もどかしう、君子と肩をならべて、いざとばかり歩を運ばせました。

『中庭のコートが一番ようございますわね。』

と、美代子はいつも其處で先生とするものですから、そのコートは先生の許可を得なくては使つてならないのだといふことを知らずに、かう申しました。君子はひそかに淺ましい笑を浮べながら、

『え、でも私は下手ですから、あのコートは立派すぎますわ。』と、知らんふりをした。

『そんなに御謙遜なさらなくつたつて。あなたは私よりずつとお上手ぢやありませんか、あのコートでしませうよ。』

『え。』

と、君子はにえきらない返辭をして歩いてゐるうちに、中庭へ來てしまひました。

『審判官なしでもようございますわね、二人ツきりだけけれど。さあはじめませう。』

と、二人とも手頃のラケット持つてネットにむかへば、美代子の心はすつかりそれに打込まれて、暫くは夢中で戦つて居りました。

『もし、もし、あなた方は誰の許可を得てこのコートをつかつていらつしやるのですか。』

突然耳もとでいはれて、驚いてみますと、竹の寮の舎監の安藝先生が、むつかしい顔をして立つて居ます。安藝先生は數學の受持で年はもう四十あまり、少ない毛を小さな束髪にまるめて、脊も低いけれど、それはく大きな眼が鋭く、オールドミスといふ事かたつて居ります。君子の父様には大層恩をうけた人なさうで、君子が今寮に入つて居るのも、その關係からだといひますが、美代子は何にも知りません。

『私のいふ事が聞えないのですか、あなた方は、一體誰の許可を得てこのコートを使つてゐるのかとお伺ひしてゐるのですよ。』



吃驚して黙つて立つて居る美代子を焦れつたさうに、先生はまたかういひました、許可を得る？ 夢にもく美代子の知らないことでした。

「いゝえあの、このコートはお許しがなくては使つちやあいけないのですか。」

反問したのが、先生にはどんなに憎らしかつたでせう。

「然うですとも、あなた御存じなかつたのですか、それはちと可笑しいですね、毎日テニスをして居ながら……君子さんも御存じなかつたの。」

「はあ先生、私はあの、このコートでするのはいけないから、よしませうくつていつたのですけれど、美代子さんはどうしてもおき

きにならないのですもの、その上、さも私が卑怯ものゝやうなことを仰有いますから、口惜しくなつてつい……御免遊ばせ。」

「それでは、いひ出したのは美代子さんなのです、しらくしいぢやありませんか、あなたは。」

「先生、私まつたく存じませんのですから、ほんとうに悪いことをいたしました、ちつとも存じませんでした。」

「おだまりなさい、あなたはほんとうにづうくしいのね、一寸職員室までいらつしやい。君子さんはすみませんが、あと片附けをして下さいな。」

「はい」

この上争ふのは無駄と思つた美代子は、片手落なこの裁判に、胸

一杯になりながらも、私は強くならなくてはと、先刻の言葉を心中でくり返してみ、きつと唇をかみしめたまゝ、おとなしく先生の後に従ひました。

テニスコートに残つた君子の姿は、あかい夕陽を受けて、淺ましい勝利の誇に輝いて居りました。

第八 ペン皿

『美代子さんは何處へ行らしたのか知ら。』

外出着の紺色のお召を大柄な米琉の平常着と着更へながら、吉野さんは呟きました。妹といふものを持つたことのない吉野さんは、

美代子が可愛くて耐らないのです。今日も今日とて保証人を訪れた歸り、とある文房具店で眼についたペン皿が、いかにも可愛らしかつたので、すぐ美代子に思つて求めたのでした。途々も、どんなに美代子が喜ぶか知らと、嬉しい思ひを抱いて、いそ／＼歸つてきてみますと、机の上の一輪ざしに、菊がほの白う香つて居るばかり、可愛い人の姿はありませんでした。

『何處へ行らしたのかしら、美代子さんは。』

再びかう呟いて、お納戸色の袴をたゝみながら、ふと見上げますと、沈んだ姿で美代子が障子ぎはに立つて居りました。

『あら美代子さんは、またかくれていらしたのね。』

と、吉野さんは晴れやかな聲でいつて、續いて起る美代子の邪氣な

い笑聲を待つて居ましたが、美代子は一言も發しません。

『どうなすつたの？え。』

立つて顔をのぞくと、美代子はすゝりないて居るのでした。

『おや、泣いていらつしやるのね、まあ一體どうなすつたのよ？』

『吉野さん。』

やう／＼一言いふと、美代子は、こらへにこらへた口惜しさ悲しさ、  
さが、一時に胸をついてきて、そのまゝ其處へくづをれました。先生に、  
いろ／＼な覺えもないことをいはれた時、のみこみ／＼した涙が、  
いま止め度なく溢れて來ます。優しい吉野さんの膝に突伏して、  
美代子はしやくりあげるのでした。

『ね、どうなすつたの？泣いてばかりいらしつちやあ解らないち

やありませんか、よ、どうなすつたの、お話なさいな、よ、よ。』  
と、吉野さんは、丁度七八つの子でもすかすやうに、美代子の肩を  
ゆすぶつて、心配さうに訊くのでした。

『吉野さん。』

暫く經つて擧げた美代子の顔には、まだ涙のあとが残つて居まし  
たけれども、につこり笑つて見せて、

『吉野さん、勘忍して下さいな、私、私ね、お家のことを想ひだし  
ましたの、急に皆に逢ひたくなつたもんですから、だから泣いちや  
つたの。御心配かけて濟みません、勘忍して下さいましな、ねえ。』  
『それならいゝけれども、私はまた……』

吉野さんはホツと息をついて、



「だまつて泣いていらつしやるんだもの、ほんとに私心配しましたわ。仕様のない赤さんねえ。」  
と、吉野さんはまた晴れやかな顔になりました。美代子はとうとう優しい吉野さんにまで語らずにしまつたのです、何事もく自分の胸一つに秘めてと、かたく誓つたのでした。

「いゝものを買つて來ましてよ。」  
思ひついて、吉野さんは紫メレンスの包からペン皿をとりだしました。

「可愛いでせう。美代子さんのよ。」

「私の？」

「えゝ。」

「下さるの、これを。」

吉野さんはだまつてうなづきました。

「ありがたう。可愛いねえ。」

「さう仰有るでせうと思つて買つて來たの、親切な姉様でせう。」

「えゝ。」

「えゝですつて、ほゝゝゝ。」

「ほゝゝゝ。」

「顔見合せて楽しさうに笑ひましたが、やがて吉野さんは、しんみりした口調になつて、

「美代子さんは羨ましいことねえ、歸りたいお家があるんですもの、私は……。」

いひさして、何か想ひだしたやうに、

「美代子さんのお母様のことを、私に話して下さらない？」

「母様のこと？ お話してよ、私の母様はね、それはく優しい瞳をもつていらしたのよ。それから眞黒ないくお髪を、いつもちやんと丸髷にお結ひなすつて、水淺黄の手柄がよく似合ひました。兩方の袖で抱くやうに私をかばひながら、美さん寒かあないかつて、顔を覗きこんでしみく、仰有つたことを、よく覚えて居ますわ、それは何でも私が五つ位の時のこと、月の佳い晩でしたの、人つ子一人通らない淋しいく土手で、すゝきばかりがざわくと、私は狐でも出さうで怖かつた、何處へいつた歸りか解らないんですけれど……でも、その優しい母様は、もういらつしやりはしないのです

もの、私が七つの年に逝つておしまひなすつたのですもの。」

「だつて美代子さんはいゝことよ、それほど母様を知つていらつしやるんだもの、私はね、父さまのお顔も母様のお顔も知らないの、兄さまも妹もありません、ひとりぼつち、たつたひとりぼつち。」

「ひとりぼつち？ あなたが？」

「然うよ。美代子さんにはお父様がおありでせう。」

「ありますわ、それから千ちゃんていふ弟も。千ちゃんはね、可愛い子なのよ、私、千ちゃんのお話をしませうか。」

「えゝどうぞ。」

「毎日謠を、そはつて居ますわ、お師匠様はお父様なの、私もお家に居た時は、千ちゃんと並んで、大きな聲でうたひましたわ。先刻

も此寮の窓によつて、千ちゃんのことを考へて居ましたら、何處からか鼓の音やら謠の聲が聞えてきたので、それでお家が戀しくなりましたの。叔父さまつてそれは母様の兄弟のね、鼓をなさる方もあるんですもの、だから千ちゃんも鼓も習つて居ますわ、學校はまだ三年ですけれど、優等ばかりとつて居ます、たゞ算術がすこしいけないだけ、あとは皆よく出来るんですよ、さうして悪戯もよくします、けれど憎らしい悪戯なんぞ一つもしませんわ……もう止ませうね、私千ちゃんに逢ひたくつて耐らないんですもの。』

『いゝのねえ美代子さんは、そんな可愛い弟さんがおありになつて。』

『本郷の叔母さまもいゝ方なのよ、美さんや〜つて可愛がつて下さいますわ。』

『あなたは幸な方ね、お母様がいらつしやらなくつても。』

『え、私自分でも幸だと思つて居ますわ。何處へいつても皆さんが可愛がつて下さるのですもの。和歌山の學校でも皆さん優しくして下さいましたの、東京へ来る時は心細かつたんですけれども、この學校の方も皆いゝ方ばかり。』

然ういふ時、美代子の眉はちよつと曇りましたが、すぐ晴れやかになつて、

『私がこの寮へ入つた晩は、そりやあ淋しかつたんですわ、お家が戀しくて〜なりませんでしたの。でも、あなたがあんなに親切にして下さつたので、どんなに嬉しかつたでせう、しみ〜お姉さまのやうな氣がしましたわ。』

『ありがたうよ。嘘にでもさう言つて下さると、私はほんとに嬉し  
いわ、ね、なんにも力になりはしないけれど、私の出来るだけのこ  
とはしますから、口惜しいことや悲しいことがあつたら、かくさず  
にお話して頂だいな、お互ひに助け合つて行きませうよ、ねえ。』

『えゝ。』  
美代子はおとなしくうなづいて、心の底では吉野さんに濟まない  
と思ひました。

### 第九 和歌の浦波

あんまり話がしめやかになつて、美代子が打ち沈んだ様子をしだ

したので、吉野さんは思ひついたやうに話題を轉じて、

『和歌山ツて好い所ですつてねえ。』

と、氣を引き立てるやうに言ひました。

『えゝ、そんなに好いッてことはないけれど、やつぱり懐かしいと  
見ひますわ。』

『大阪の方から行くんでせう。』

『えゝさうよ、大阪から行く方が便利ですわ、奈良からでも行かれ  
ますけれど。』

『蜜柑の實る暖かい南國へ、私、一度行つて見たいわ。』

『冬休みになつたらいらッしやいな。大阪から南海線に乗つて、紀  
の川の鐵橋をわたる時のことを考へると、私もう堪らなくなつかし

くなりますわ。汽車の窓から顔を出すと、向ふの高い森の上に、お城の白壁が際立つて白く見えるでせう、そりやほんとに胸がぞくぞくすることよ。」

と、美代子は眼を輝かして話し出しました。」

「お城があるんですか。」

「え、ありますわ、徳川さんの御三家の内だつたんですもの。」

「あ、さう、紀州侯ッて言ふわねえ。」

「だから、昔は和歌山は随分威張つてゐたんですツて。」

「それで、あなたのやうな可愛い方が出来たのね。」

と、吉野さんは冗談ぢく笑ひながら言ひました。

「あら厭だ吉野さん、あんなこと言つて。昔のことぢやありません

か。」

美代子は子供らしう、一寸すねた顔をして見せました。

「御免なさい。今のは冗談だけれど、ほんとに私、和歌山ツていふ

所はまだ見もしないのに、何だか懐かしい気がするのよ、和歌の浦

だの紀の川だのつて、名をきいたゞけでも好きになりますわ。」

「紀の川は私も好きよ、水がきれいませう、それに吉野の方から材

木の筏を流して来るんですもの、詩的ですよ。春の末になると、川

上から流れて来る筏の上に、薄雪が降つたやうに櫻の花片が散つて

ゐることがありますの。雨の降る日なんか橋の上に佇んで、花片を

載せた筏が音もなく下つて行くのを見て居ると、何だかわびしいや

うな懐かしい気がするのよ。その花片は吉野の山奥から、何處へ

行くとも知らずに運ばれて来たんぢやないかと思ふと、ほんとにいろんな感じがしますわ。』

『さうでせうねえ、何だか美文集にでもありさうな景色ね。』

『え、全くさうよ。私、いつでしたか春の夕暮に、ちつと筏の花片を見てゐたら、悲しくなつたことがありましたわ。』

と、美代子は遠い過去の或るものを追ふやうな眼つきで、うつとりと吉野さんの顔を見上げました。

『お話を聞いたいけども、そゝられるやうな気がするんですもの。逝く春の夕に、そんな詩的なものを見たら、さぞいろんな感じがするでせうねえ。それに和歌の浦はなほ好いでせう、和歌の浦には名所が御座るッて言ふぢやありませんか。』

『え、一に権現二に玉津島でせう。』

『三にさがり松四に鹽竈よ、オホ、私だつて知つてるでせう。』

と、吉野さんは節をつけて、陽気に笑ひながら言ひました。

『でも、さがり松だの鹽竈だのッて名高いでだけで、實際はそんなによかあないのよ。それより男波女波の景色だの、三斷橋だの、方が、よつほど好いと思ふわ。それから三井寺の景色も好いのよ、境内に上ると和歌の浦の景色が、ちやうど大きなお庭のやうに一目に見えるんですもの。』

『三井寺ッて名高いお寺だわねえ、和歌の浦にあるんですか。』  
『え、少しは離れてゐるけれど、やつぱり續いてゐますの。和歌』

山から和歌の浦を通つて三井寺の下まで、電車が通じて居りますわ。それにこの頃は昇降器なんか出来たから、夏になるとそりやあ賑やかなの。でも私、夏はあんまり混雑するから嫌ひなのよ、逝く春の頃が一番好いわ。』

『蜜柑の出来る時分も好いでせう。』

『え、好いわ、和歌山から電車に乗つて三井寺の方へ行くと、左手の山の中ほどの斜面が、すつかり蜜柑畑になつてゐますの。綺麗ですわ。』

『羨ましいいわねえ、私なんか北の國に産れたものは、南國の話聞いて想像するだけでも楽しいんですもの。』  
『だから一度いらッしやいな。』

と、美代子は今にも行けることのやうに促しました。

『行きたいけれど……。』

と言つて、吉野さんは暫らく窓の外に眼をそらしてゐましたが、やがてまた美代子の方に向いて、

『和歌山の女學校は好いでせうねえ。』

と、言葉に力を入れました。

『でも、田舎風なんですもの。』

と、美代子は謙遜らしう言ひながらも、心の中では校門の兩側に並んだポプラの木立や、親しいお友だちの玉子さんや袖子さんのことを、それからそれへと思ひ浮べて、あの懐かしい講堂で『紀の國の歌』を歌つた日のことなどを追想しました。而して、

『あの歌をよく歌つたつけ。』

と、ひとり言のやうに俯いて言ひました。

『あの歌ッてどんな歌？』

『……どんな歌ッて、田舎の歌ですわ。』

『和歌山女学校の校歌なの？』

『え、校歌ッて譯ぢやないんですけれど、和歌山の學校でみんな歌ふ紀の國の歌ッていふのがあるの。』

『さう、聞かせて頂だいな。』

『だつて可笑しいんですもの。』

『好いわ、聞かせて頂だいよ、ね、美代子さん。』

と言はれて、美代子は俯いたまゝキマリわるさうにしてゐましたが、

さすがに懐かしさに歌つて見たい氣もして、

『ぢやア歌つて見ませうか、笑つちやア厭よ。……四ッあるんですけれど。』

和歌のうら波やさしくも

那智の瀧つ瀬勇ましくも

わが國びとのをりにつけ

たちふるまひし歴史見よ

と、低い調子ではあるが潤ひのある美しい聲で、その第一章を歌つて聞かせました。

『をかしいでせう、これを皆で歌ふのよ、一二三四と四ッあるの。』  
『好い歌だわねえ、もう一ッその次を歌つて頂だいな。』



『もう好いのよ、何だかキマリが悪いから。』  
と言つて居る時、ジャラン〜とベルの音、食堂が開くといふ報知  
なのです。

『あゝもう御飯よ、行きませうか。』

吉野さんは歌も聞きたくはあるけれど、といふやうな顔をして、  
あたりを見廻しつゝ立ち上りました。

『え、行きませう。』

と、美代子も續いて立ち上つて、ふと先刻悲しい話をした時のこと  
を思ひ出して、

『私の顔、をかしくはなくツて？』  
と、用心ぶかく聞きました。

『いゝえちつとも、前髪が少し亂れてゐますわ、一寸お待ちなさい  
よ、搔いてあげませう。』

柘植の髪櫛を取り出して、手早く二三度かきあげ、

『さ、よくなりました。……あら、あなたはまだお袴とつていらつ  
しやらないのね。』

『まあ、私すつかり忘れてた、吉野さんお先へいらして下さいな。』  
『いゝことよ、ゆつくりしていらつしやいな。』

板締縮緬と紫縹子の打合せ帯を、小さなお太鼓にきつちり結んで、  
吉野さんと手とり合つて食堂にゆくと、皆はもうお箸を取つてゐ  
ました。

二人の入つて來たのを見て、一番年嵩で意地のわるい勝子が、ね、

と隣の八重子の袖をひきました。え、とそれからそれへと、みんな顔見合せて意味ありげな冷たい眼を二人に注ぎましたが、二人はそんなことには少しも気がつかず、

「遅れまして。」

と、挨拶しながら食卓につきました。

『どういたしまして。』

勝子は冷やかに答へながら、お湯を注いで居ります。見わたしたところ、座が何となく白けて、吉野さんは一種不快の感を抱かすにはあられませんでした。

### 第一〇 鬼ごっこ

美代子は昨日の出来ごとから、多くのお友だちに悪く思はれてゐるといふことも知らず、先生に叱られたのも、たゞ自分の過ちとして、深くは何事も思はないで居りました。

この頃学校ではお休み時間に、みんなが組を組んで鬼ごっこをしたり、目かくしをしたりすることが流行つてゐました。併し美代子は、いつもテニスばかりしてゐましたので、みんなと一緒に仲間入りをして遊ぶといふことはありませんでした。

けれども、昨日テニスのことから叱られた後でもあり、いつも誘

つて下さる森田先生も、何かお忙しいことがあると見えて、朝一寸運動場へお出でになつたぎり、お見えになりませんので、

『私も入れて頂戴な。』

と、これから鬼ごつこを初めやうとして、君子やよし子が大勢圓くなつてゐる處へ行つて、斯う頼みました。

『ね、後生だから私も入れて頂戴な。』

事情を知らない美代子は、いつもの通りあどけない様子で、中でも一番年上の勝子の袖にすがりながらももう一度、

『ね、ね、入れて頂戴よう、後生だから。』

と、たい深い意味もなく、黙つて顔を見合してゐる皆が、一時の意地悪から自分をからかつて居るのだらうと思つてゐました。

『だつて、今一人入つちやア都合が悪いんですもの。』

『あら、どうして？』

『人の數が合はないのよ、ねえ。』

と、勝子は君子と眼を見合はして妙な笑みを浮かべました。美代子はそれとも知らないで、尙も甘えるやうに袖を振り動かして、

『あんまりね、ちやア何誰かと代つて頂戴な、いゝでせう。』

『そんな勝手なことは出来ないわ、誰だつて代る人なんかありやあしないんですもの、もうこれでちやんと揃つてゐるから、仕方がないことよ、ねえ皆さん、早く初めませうか。』

と、勝子はわざとらしく、みんなを促し立てました。斯う言はれる

と、美代子は是非なさうに、

「ちやアこの次は入れて頂だいね、きつとよ、いゝこと。」

「そりやア解らないことよ、誰か抜ける人がなければ、入れられな  
いんですもの。」

「誰か代つて下さればいゝわ、ね、今度は入れて頂戴よ。」

と言つても、誰もそれには答へやうともしないで、美代子一人を殘  
して、運動場を面白さうに駆け廻るのでした。

それでも美代子は、まだこの次に誰か代つてくれるものと正直に  
考へて、みんなの楽しく遊び戯れてゐるのを、自分もその中の一人  
であるかのやうな心もちで、ニコくしながら傍観してゐました。

一度の遊びが済んで、二度目の鬼が代らうとする時、美代子はま

た勝子の袖にすがつて、

「よう勝子さん、今度は私を入れて頂戴な。」

「だつて、まだ何誰もお抜けにならないぢやありませんか。」

「でも私、今まで待つてたんですもの、一度何誰かと代つて下すつ  
たつて好いちやありませんか、私、鬼になつても好いから、ね。」

と、頼みました。

「美代子さんを鬼にしちやア勿體ないわ。」

と、傍によつて來た八重子が言ひました。

「あらいやだ、ほんとに私鬼になつても關はないのよ。」

「あなた鬼になりたいの？」

と、今度は勝子が意味ありげに聞きました。

「え、入れて下されば鬼になつてよ。」

「鬼になつて苦しくつても好いこと。」

「え、え、構やしないわ。」

と、美代子が言ふと、勝子は獨りうなづいて、

「ねえ皆さん、如何でせう、美代子さんの御希望なんだから、鬼になつて頂きませうか。」

と、君子をはじめ、よし子、八重子と一人々々に何か耳打ちをして、

「ね、い、でせう解つて。」

と、ニヤリと妙な笑ひやうをしました。

「え、好いことよ。」

君子も横を向いてクスリと卑しい笑を洩らして、流し目に美代子

を見やつて、

「ぢやアこと子さん、あなた代つてお上げなさいよ。」

と言ひました。

「え、さうしませう、美代子さん代つて上げてよ、さア鬼におんななさい。」

「さう有難う、やつと私入れて頂いたのね、私、一生懸命追ッかけることよ。」

漸う一同の承諾を得て、嬉しさうに美代子は遊びの群に加はりま

した。すると一同は、祕密に打合はせをして居たものですから、

「オホ、さア捕まへて頂戴、オットこつちですよ。」

「鬼さんこつち……。」

「鈍い鬼さんねえ、オホ、、、。」

と、わざと間近までよつて来て捕まへられさうになると、他の人が邪魔をしたり、囃したてたり、時によると折角捕まへてゐるのに手を離させたりして、巧みにみんな逃れ去つて、いつまでも美代子の鬼を止させませんでした。

はじめの中は美代子も面白半分に、右に左にお友だちを追ッ駆けて、楽しさうに騒いでゐましたけれど、だん／＼息は苦しくなるし、なかく／＼誰一人も捕まへられさうにありませんので、

「お、苦しい、みんなあんまり逃げ方が激しいんですもの、私もう息が苦しくなつちやつてよ。」

と、せい／＼息をはづませながら、手を拍いて笑つてゐるみんなの方に、そろ／＼と歩いてゆきました。

「弱い鬼さんねえ、さアお捕まへなさいな。」

「あなたが好きな鬼になつたんぢやありませんか、早くなさいなねえ。」

「美代子さんは鬼が好きなんでせう、オホ、、、。」

「勝手になつた鬼さんのくせに……。」

「鬼さん、捕まへてちやうだいな。」

と、一同で冷評すやうに囃し立てます。美代子は堪らなくなつて泣き出したくなりました。

この日から美代子は、勝子や君子をはじめ皆から「鬼さん」とい

ふ綽名をつけられました。

第一一 ポプラの蔭

『先刻は鬼さん泣いてゐたぢやないの。』

『鬼の眼に涙つて、あのことも知れないわ。』

『でも、先刻はあんまり苛めるんですもの、可哀さうだつたわ。』

と、どつちかと言へばお人好しのわか子が、氣の毒さうな顔をしました。

『好いわ、關やしない、田舎ものゝ癖にこの頃の威張り加減たらないんですもの、いゝ氣味だつたわ、ねえ君子さん。』

『本當よ、わか子さんはなか／＼同情家なのね、美代子さんにお世辭でも使つて、森田先生のお花にでもしてお貰ひなさいな。』

『それが好いのよ、わか子さんは。』

『私いやなことだわ、誰があんな美代子さんなんぞにお世辭を使ふもんですか。』

『オホ、ゝゝゝ、わか子さんは眞面目よ、誰がねえ、あんな田舎ものに……安藝先生もさういつてらしたわ、一體が生意氣すぎるつて。』

と、君子は先生と自分の家とが心安いといふことを暗に仄めかしました。

『でも美代子さんは、氣がつかかなかつたわねえ。』

「あの位のことしたつて、通じやしないんだからをかしいわ。」  
「やつぱり田舎ものつて、神経遅鈍なのよ。」  
「全くね、あれでまだ知らずに居るんですもの。」  
運動場のポプラの蔭に集まつた君子たちは、前の遊び時間のことを話し合つて、さんぐ美代子の悪口を言ひ合つてゐました。美代子はそれとも知らずに、靴音軽やかにそこへ馳せ寄つて、  
「皆さん、こゝにいらしたの、私花壇の方かと思つて随分さがしたのよ。」  
と、何時もの華やかな顔に、につこり笑つて見せました。  
「そりやアどうもお氣の毒さまッ。」  
「誰も頼みやアしなかつたわ。」

と、八重子と博子とが皮肉に言ひ放ちました。  
「だつて私、一人ぼちなんですもの、また何かして遊びませうか。」  
「え、どうぞ、もう一度鬼さんになつて下さるの？」  
「鬼になつても好いけれど、私先刻は苦しかつたのよ、あんまり皆さんがひどいんで。」  
「あなたがお好きだつたんですもの、仕方がないわ。」  
「え、でももう息が苦しくつて胸が痛くなつちやつたのよ、何かなさらないの、みなさんでね。」  
「私たちと違つて、美代子さんは森田先生がついてらつしやるんですもの、先生とお二人でお遊びなさるといゝわ。」  
と、誰かい言ふと、みんな申し合はしたやうに、オホ、と聲高



に笑ひました。

『まあ、あんなこと。』

さすがに斯う言はれて、美代子は顔を赧らめて、俯いたまゝだまつてしまひました。

『ほんとにさうよ、森田先生とお二人なら、美代子さんは私たちが居ない方が好いでせう。』

『そりやアさうだわ、ねえ美代子さん。』

『随分御熱中ね。』

『お花ッ、うらやましいことよ。』

『おめでたう、美代子さん。』

『ほんとに何でもよくお出来なさる筈だわねえ、森田先生がついて

らつしやるんですもの。』

『獨唱なんかもお上手な筈よ、何にしても美代子さんは御幸福ね。』

『先生もハイカラでお綺麗なんですもの。』

『だから、誰かさんも真似してらつしやるんだわ。』

『オホ、、、、あの前髪の出し方までそっくりよ。』

『お袴の色もね……。』

『紐の結び方まで、先生そっくりよ、さすがに違つたものよ。』

『それに藤原先生もアレなんでせう。』

『さうよく、胡麻をするのがお上手なんですもの、私たちのやうなものとはとても及ばないわ。』

『私にも胡麻のすり方を教へて頂だいな。』

「私にもどうぞ。」

「美代子さん、どうぞ。」

さんく〜に皆から冷評されて、美代子は今さら自分一人が、この人たちから除けものにされてゐるといふことを知ると同時に、その理由を考へはじめました。

「森田先生や、藤原先生がどうなすつたんですの。」

と、口惜しまぎれに問ひ返さうと思ひましたけれど、今の場合そんなこと言つても、却つて皆にいちめられるばかりだと、ちつとこらへて心のうちでは、

「やつぱり私は、どこまでも優さしい心もちと強さつとをもちたなければ。」

と、たい俯いたたまゝ黙つて、袴の紐を噛みしめて居ました。

「もうあんまり言ふのは止ませうよ、ね、また森田先生や藤原先生に言ひつけられると恐いから、ね。」

と、あとから來合せた勝子をはじめ君子、よし子、八重子、こと子、わか子たちは、美代子を尻目にかけて言ひました。

「ほんとに恐いわねえ、こんな所に一しよに居ないで、見つけられて睨まれないうちに、私たちは彼方へ行きませうよ。」

「ちやあ鬼さん、左様なら。」

「左様なら、鬼子さん。」

と、口々に言ひながらみんながバタ〜と駆け出した時、次の時間

の鐘が高くく鳴り響きました。

## 第一二 國語の時間

次の時間には、藤原先生の國語がありました。いつもの美代子ならば、藤原先生の時間をどんなに楽しみにしたか知れません。先生のあの柔らかなお顔、ふつくり出した前髪、お背がスラリとして居ますから、折目正しく胸高にキチンとお穿きになつた薄鼠色のお袴も、一しほよく似合ひます。まだお年が若いからでせう、教室ではどこか恥かしさうに俯き加減にしてお講義をなさる細く通つたお聲、生徒は皆引き入れられて、うつとりと耳を傾けるのでした。

そのなつかしい先生の時間が来たのに、美代子は今の先、運動場でみんなから言はれた言葉が釘をさされたやうに胸をうつので、先生のお顔を見るのも、何故とはなく恐ろしい罪を犯すやうな気がして、小さい胸は痛いほど高く波打つてゐました。

『今日は皆さん、大層お静かですね。』

藤原先生はしとやかに教壇に進んで、一同の顔を見まはしながら、斯う言つてにつこりしました。美代子は俯いたまゝ袴の紐を結んだり解いたりしてゐました。

『今日は「香山の雲」ツていふ所でしたね、下調べをしていらつしやいましたか。何誰かに読んで頂きますせう……えゝと京極さん。』と、何事も御存じない先生は、いきなり美代子をお指しになりました。

た。美代子はハツと思つて、顔のほてりを覺えました。

「京極さん、読んで下さい。香山の雲です、お讀めになるでせう。」  
 と言はれましたけれど、美代子は顔を赧らめるばかりで、返事もせず立ち上らうともしませんでした。

「どうなさいました、え？」

先生は不審さうに美代子の俯向いた様子を見つめながら、

「お讀めになるでせう、え、え、どうかなすつたの？京極さん。」

と、やさしく言はれても、美代子はやはり一言も答へず、清い耳朶の根元まで眞赤にして居ました。後の方で誰かい、

「鬼子さん、泣いてらつしやるんぢやないの。」

と、さゝやく聲がしました。すると、ついでに何處からともなくク

ス〜と忍び笑ひをする聲が起りました。

「變ですなあ京極さん、お加減でもお悪いんぢやありませんか、え、何誰か御存じ？」

と、すつと生徒の方を見渡して、いぶかしさうにお尋ねになりました。

「鬼のことも考へてらつしやるんでせう。」

「まさか、オホ〜、〜、〜。」

「オホ〜、〜、〜。」

と、今度は無遠慮に方々から聲を上げて笑ふものがありました。

これを聞いてたまりかねた美代子は、机の上にヒタと顔を押しあて、兩袖に眼をおさへて、前髪を微かにふるはせて居ました。

「まあ、京極さんはどうなすつたといふんでせう。」  
いつもの快活さに似ないで、藤原先生も眉を曇らせながら、美代子の机の傍まで足を運んで、

「ほんとお加減が悪いんでせう、気分がわるかつたら、今の時間はお部屋へ歸つてお休みなさいまし。」

と、肩に手をかけて言ひました。が、それでも美代子は、身動きもしないで突伏してゐるので、

「どうしたといふんでせうね。」

と、先生も颯めた眉の許にちつと美代子の背を見守りました。

美代子は先生に斯う親しい言葉をかけられるのが、世にも恐ろしいことのやうに身を縮めて居ました。同級生の或る人たちは、豫想

通りの幕が開かれたと言はぬばかりに、誇りと嫉みとの眼をあげて、すゝり泣いてゐる美代子を冷たい笑みを浮べて見て居りました。

### 第一三 輝く夕日

こんなことがあつてから、美代子の心には暗い冷たい影が投げられました。お友だちの憎しみや、嫉みを受けて居ることすら知らないで過して居た位、無邪氣であつた美代子は、今さら人の心の淺ましさを泌みくゝ感じて、郷里戀しさに人知れぬ涙をこぼしました。

「なせ私は、お友だちに苛められるんだらう。」

その日、學校から寮舎へ歸る途々も、自分と自分の心に斯う尋ね

て見ました。

「森田先生や藤原先生が、私のことを何か仰つしやつたのか知らずけれど、そんなことはないわ。」

と、築いてはくづし、崩しては築きして、今日運動場で言はれたことや、教室での出来ごとを一つ一つ考へて居りました。

「このあひだは君子さんも勝子さんも、藤原先生が大好きだつて、私にお話しになつた癖に……よし子さんだつて、わか子さんだつて、政江さんだつて、さう仰つしやつたわ、私ばかりぢやないんだのに。」

斯う考へると、美代子は皆から苛められる理由が、だんだん、解らなくなりました。

「あゝ困つたわねえ、和歌山に居る時分なんか、ちつともこんなことなんぞなかつたけれど。」

と、楽しく華やかに豫想して来た都會の、かへつて淋しく淺ましいのを思つて、ほつと吐息を洩らしました。

「玉子さんや袖子さんはどうなすつたか知ら、この頃ちつともお便りが無いけれど……あの時分はほんとに毎日楽しかつたわ。」

なつかしい昔の友、優しい心の友の面影を眼に浮べて、ぼんやりと華壇の前に佇んで居ました。

「まあ美代子さん、こんな處に何をしていらつしやるの、あなたのお歸りが遅いから、お迎へに来て上げたのよ。」

姉らしい懐かしみを持つた聲で、吉野さんがボンと後から背を叩

いて、ふつさりとした美代子のお下髪に掛けてある紺青のリボンのゆがんだのを直しながら、

『ほんとに仕様のない赤ちやんね、またきつとお家が戀しくなつたんでせう、ホ、さア早く寮へ歸りませうよ。』

と、美代子の美しい眼が濕んで居るのを見付けた吉野さんは、可愛いものでも賺すやうに、その顔を覗き込みました。

美代子はこの優しい人の胸に絶つて、今日あつたことをすつかり打明けて、思ふさま堪へて居た涙を落して見たいと、つとその顔を振り仰ぎました。

『弱蟲さんね、そんなにお郷里が戀しいの、オホ、もうおよしなさいな、而していつものやうに元氣をよくして頂戴、私も淋

しくなるから。』

と、何事も知らない吉野さんは、美代子がまた例のホームシツクを起して居ることばかり思つて、抑へつけるやうに、わざと快活に斯う言ひましたので、

『え、』

美代子は微かに答へて、すべてをまた胸に包んだまゝ、少し薄暗くなりかけた寮舎の方へ、吉野さんと手を組んで歸りました。

西の方に一刷毛燃えるやうに輝く夕日を浴びて立つ、高い竹の寮の窓からは、調子の高い唱歌の美しい聲が洩れ聞えました。

第一四 教室の入口

次の日、美代子は殊さらに何気ない顔をしてゐましたけれど、勝子や君子たちの一群は、昨日にも増して意地わるく美代子に當りました。

「美代子さん、昨日はさぞお嬉しかったでせうね。」

と、教室の入口の所で、君子が第一に言葉をかけました。

「まあ、私……」

「オホ、ほんとに羨やましかつてよ、藤原先生が御心配していらつしやることよ。」

「それから、あなたが見えないつて、森田先生と大騒ぎよ。」

「美代子さん、おめでたう。」

「おめでたう！」

「鬼子さん、おめでたう。」

と、君子を中央にして、はや三人四人と寄つて来て、口々に妙に當てつけがましいことを言ひました。

「まあ、あんな……」

と言つたぎり、美代子は眼に一ぱい露を宿らして、力なく首を垂れてしまひました。

「ほんとに美代さんはお幸福ね、自分の勝手に拗ねても、あんなに先生からお優しく御機嫌を取られるんですもの、お花ツて徳だね。」





「さうよ、何でもあの通り御親切なんですもの、學課だつてよくお出来なさる筈だわ。」

「でも仕方がないことよ、最員にされてよく出来るんぢや心細いことね、私なんぞ落第したつて、實力さへつけば好いと思つてるわ。」

「そりやさうよ、お花でよく出来るのはちつとも、名譽ぢやないんですもの。今に解つてくるでせう。」

と、さんぐに悪口を言つて、可憐な美代子が俯向いたまゝ、長い袂を顔にあてゝすゝり泣くのを、

「おゝ恐い、あの泪でまた先生のお袖に縋らうつていふんだから。」

「私たちなんかお傍に居たら悪いわねえ、早く運動場へ行きませう。」

と、憎まれ口を後に残して、さつさとみんなで廊下をバタ／＼と驅

けて行きました。

美代子は何時まで教室の戸の蔭に立つて、泣けるだけ泣きました。罪もないのに、斯うして毎日皆から苛められる美代子は、その度ごとになつかしい郷里の空をながめて、

『お父様にさういつて、お國へ歸らして頂かうかしら。』  
と思ひますが、折角安心してお歸りなすつたお父様に御心配をかけるのは濟まない、それに自分さへちやんとして居たら、いつかは皆の憎しみも解けるであらう、やがては美しい楽しい春も来て、暖かい風も吹くであらう、と幾度も考へては氣を取り直し、そつと涙を抑へました。

『私は、私は何にも思はずによく勉強して、お父様が仰つしやつたやうに好い心掛さへしてゐれば好いのだ、もう何にも言ひますまい、思ひますまい。』  
と、健氣に心を定めて、何もかも小さい胸に包んで、自分のゆくべき道を守らうと獨り心に誓ひました。

第一五 植 物 園

待つた日曜日来ました。  
芳子、君子、八重子、政江、琴子、文子の六人は、先日の約束通り同勢打ちつれて、小石川は御殿町なる植物園の門をくぐりました。幾度も來馴れた處ながら、くる度にまた變つた氣分が味は、れて、

嬉しい感じのする處です。秋もとう末のことゝて、花の盛りは過ぎて居ますけれど、それでもまだ豆菊が、黄なのや赤いのや色とりどりに咲き亂れて、みる人の眼をよろこばせて居ります。男の學生、女の學生、カンバス据ゑて寫生に餘念ない人々の群れ、あるはまた、病身らしい令嬢のペール深くかついで、そいろ歩いて居るなど、すべてが畫に詩に美しきところ。蘇鐵のあの大きな針のやうな葉が、好い感じを與へてくれます。カサ／＼と落葉を踏んで林間を逍遙うて居りますと、故知らぬ静寂の感がヒシ／＼と胸に迫つて來ますし、枯れた芝生に身を投げ出して、暖かい太陽を浴びると、さながら詩の一節に詠み込まれてゐるやうにも思はれます。葉のすつかり落ち盡した白樺の幹の白さが、午後一時の太陽にくつきりとゑがき出さ

れて居ました。とある樹かげに据ゑられたベンチの一つに、眞先に腰を下したのは君子でした。

『あゝ、いゝ氣持ねえ。』

がつくり後へ倚りかゝつて、藍と白と半々の空を仰いで、心から氣持よさうにいひました。

『いゝ氣持、かう背中へぼか／＼と太陽のあたるところは、何ともいへない好い氣持だわ。』

芳子は君子と相對して、太陽を背にうけて足を投げだしました。あとの四人も皆それ／＼に座をしめて、

『いゝ氣持ちねえ。』

と、顔見合せてほゝゑみました。

「何かお話しなくつて。」

「え、しませうか、昔々ある處に爺さんと婆さんがありました。」

「知つてるわそんなこと、爺さんは山へ柴かりに、婆さんは川へ洗濯によ。」

「さうしたら、ほかアリく、大きな桃が流れて來ましたとさ。」

「いやだ、桃太郎のお話なんか。私等は幼稚園の生徒ぢや御座いません。」

「然り、梅園高等女學校三年A組の生徒であります。」

「いやよもう。そんな冗談はよすこと、もつと眞面目なお話しませうよ。」

「眞面目なつてどんなこと。」

「御らんなさい、私達のやうに遊んでる人なんて、一人もありやしないわ。」

君子のいふ通り、其處此處に三々五々集まつて居る人達は、皆教科書を讀んだり暗記ものをしたりして居るのでした。

「ね、だから私達ばかり馬鹿話して遊んで居ちや恥かしいことよ。」

「ちつとも、だつて私達は始めつから遊ぶつもりで來たんですもの、遠慮することなんか一つもないわ。」

かういひ切つたのは、美代子と同じ寮の八重子でした。

「それもさうね、やつぱし私達は私達で、ほかの人には構はずに、のんきにお話しませうよ。」

「それがいゝわ、それがいゝわ。」

「ちよいと、あの人は何を書いてゐるんでせうか、私のぞいて来るわ。」

政江がかういつて立ち上りました。

「あら、お止しなさいな、悪いことよ。」

「よくつてよ、かまやしないわ、そうつとだから。」

政江は足音を忍ばせて、その女の人の後に立ちました。みられるのはもう馴れつこになつてゐるのか、その人は少しも動せず、青、赤、コバルトと、巧みに色を使ひわけてゆきます。

「温室を書いて居るのよ。」

歸つてきた政江は、手柄顔にいひました。

「さう、お上手？」

「え、よくはわからないけれども。落付いたものね。」

「そりや極まつてますわ、こんな處で書かうつていふほどの人ですもの。」

「あ、温室を見ない？」

文子が突然に頓狂な聲をだしたので、皆は吃驚しました。

「あ、驚いた、何ごとかと思つたわ、文子さんはよく頓狂な聲を出すわね。」

「私も吃驚しちやつたわ。」

「突然なんですもの、驚くわ。」

皆から攻撃されて、文子はすこししよげながら、

「だつて、温室を書いていらつしやるつていふんで思ひついたんで

すもの、ね、見なくつて？」

「然うねえ。」

「私はいやよ、こゝを動かしたくないんですもの、文子さんそんなに見たいのなら、あなた一人でみていらつしやいよ、私はいやよ、あゝこのまゝ眠つてしまひたい、さうして眠つたまゝ死んでしまつたら、どんなにいと心持でせう。」

「おゝいや、死ぬなんて厭なこと。」

「いゝえ、たゞさういつてみたゞけなのよ、ほんとうは私だつてまだ死ぬのはいや。」

「ほゝゝゝ。」

「ほゝゝゝ。」

「ほゝゝゝ。」

「でも、本當にいと心持ちねえ、いつまでもくゝかうして居たいわ。皆は何事も打ち忘れて、柔かい氣分になりました。

けれど、この平和はつゞきませんでした。それは、温室の蔭から現はれた三人連れ、それが森田先生と吉野さんと美代子だといふことを、政江が目敏く見附けたからなのです。

「ちよつとくゝ、大變よ、大變よ。」

あわたいしい物いひに皆は驚いて、

「何、何、何が大變なの政江さん。」

「あんまりだわ、あんまりだわ、森田先生が美代子さんを連れていらしてよ。」

「え、森田先生が？」

皆は、はつと眼をみはつて、政江の指す方を眺めました。

樂しげにさいめきながら、返り咲きの薔薇の前に立つてゐる人の姿、紛れもない美代子等であるといふことを明らかに認めて、君子の眼は燃えるやうに輝きました。けれど一言も發しません。

「ずいぶんねえ、森田先生は。」

「だつて先生がお悪いんぢやないことよ、美代子さんが胡麻をするのですもの、屹度私達の悪口いつてゐるにちがひないわ。」

「さうよ、だからこの頃先生は、美代子さん／＼つて仰有るのね。」

「森田先生ばかりぢやないわ、藤原先生だつて、そら、先日の國語の時間には、ね。」

「え、あの時はほんとうに惜らしかつたわねえ、何にも御存じないと思つて、いゝ氣になつて居るんですもの。ねえ。」

「いくら可愛がつていらしたつて、あのラニスコートのことをおきゝなすつたら……お先はもう知れてるわ。」

「可愛がられるのも今の内だけよ。」

三人に羨望の眼を注ぎながら、各自に勝手な口を利いて居ります。

「でも随分圖々しい人よ、ねえ、先日あんなに言つてやつたのに、平氣な顔をして居るんですもの。」

「でなくちや胡麻はすれないわ。」

「ほ、ほ、ほ。」

「ほ、ほ、ほ。」

大きな聲で笑つたので、ふと美代子は振りむきました。  
「おや。」

はッと胸をうたれて、小さく呟きますと、

「どうして？ 美代子さん。」

と、吉野さんがきつとがめました。

「君子さんたちが来ていらしてよ。」

苦しさを笑顔にかへて申しますと、

「君子さんが？」

と、森田先生も振り返つて、

「あゝ、大勢で来ていらつしやるのね、行つて見ませう。」

と、もうそちらへ歩を運ばせようと思いました。吉野さんも、

「大勢になつて嬉しいわね。」

と、美代子にさゝやきました。

「えゝ。」

と、美代子にはこれが精一杯の答でした。

「皆さんお揃ひで……。」

森田先生はやさしい笑顔を見せて、君子等の前に立ちました。

「あら！」

「先生まあ。」

皆は今始めて知つたかのやうに、バラ／＼と立ち上つて、先生のまはりを取りまきました。そして美代子をしり眼にかけながら、

「何時入らつしやいまして先生、私達ちつとも存じませんでしたわ。」



「一時間ほど前、あなた方は？」

「私たちはもう先刻から、ねえ君子さん。」

「ええ。先生この芝生はそりやあ暖かいんで御座いますよ。」

「ちつと座つてますと、眠くなつてしまひますわ。」

「いまね、皆で先生のお噂申し上げてましたの、こんな時に先生と

御一しよだつたらどんなにつて、ねえ。」

「ええ、それが事實になつたのですもの、こんな嬉しいことありま

せんわ。」

「ほんとにうれしい。」

「嬉しいッ。」

「おなじ處に居ながら、今まで逢へなかつたなんて、不思議ですわ

ねえ。」

わやく／＼がやく／＼、皆が一どきに饒舌りたてる喧しさつたらあり

ません。

「ええ、ええ。」

と、先生はほゝゑみながら、

「ちと歩いてみませんか。」

「はあ。」

と、皆は先生をかこんで、ぞろ／＼歩き出しました。美代子は後の方

方に小さくなつて、吉野さんの蔭にかくれるやうにして歩いてゆき

ましたが、そうつと、

「私歸りたいわ。」

と囁きました。

「何故？もう飽きて？」

「いゝえ、然うぢやないんですけれど、疲れちまつたんですもの。」

「弱いのね、あなたは。」

吉野さんは何事も知りませんから、からかふやうに笑ひました。

「だあつて。」

と、美代子も甘えるやうにいひましたが、涙がこみあげて來たので、俯いてしまひました。

「先生！」

「なに？」

「あの私、ほんとうに濟みませんけれども、お先きに失禮いたしま

す、用事を忘れて居りましたから……美代子さん、あなた一しよに歸つて下さるでせう。」

優しい吉野さんはかういひだしました。君子等の態度と美代子の態度とを見比べて、その間に何等かの事情の蟠まつて居るらしい事を、うす／＼感づいた吉野さんは、おとなしい美代子が耐らなくいぢらしくなつて、先へ歸らうと決心したのでした。

「ま、お歸りなさる？それぢや私も歸りませうよ、折角御一しよに來たのですもの。」

「いゝえ先生、先生はどうぞ君子さんたちと御一しよに……ね、先生、どうぞ……。」

「歸りませうよ私たちも、ねえ皆さん。」

君子がいひますと、

「え、歸りませうよ、先生、私たちも御一しよに歸りますわ。」  
と、芳子や政江たちもいひだしました。

「あら、それぢや濟みませんわ私、私一人のために皆さんに御迷惑  
かけるんですもの、私それぢやあ……。」

「い、でせう吉野さん、皆さんも、うお歸りなさるつていふんです  
から、ね、みんな揃つて一しよに歸りませうよ。」

「まあ、すみません。」

見下せば池のさいなみキラくと、ふりかへりみる温室の、カッ  
と夕陽のさしたガラス一重をへだてた中には、幾百里の波路はるば  
ると外國から來た花が、みどりに紅に、さぞ美しいこととせう。け

れど、その色その姿のとりくに異なるやう、こゝに集まつた人た  
ちも一人一人の思ひを抱いて、ぞろぞろと坂を下りかけました。

「ありがたうよ。」

美代子は胸にあまる感謝の念を、たゞ一言叫びますと、

「姉妹ぢやありませんか。」

と、吉野さんは美代子の手を、かたく握りしめました。  
何處かでチ、と小鳥の聲がきこえます。

第一六 懐かしい思ひ出

『お寢つていらつしやるの。』

そうつと障子を開けて、吉野さんが薬瓶を手にして入つて來ました。

『いゝえ。』

美代子は、綺麗な花模様のメリンスの掛布團を少しはねのけて、頬にかゝつた後れ毛をうるさうにかき上げながら、につこり笑ひました。

『氣分はどう？ お薬を頂いて來てよ、今日は散薬が丸薬に變つたの。』  
さういひながら吉野さんは包みをほどいて、枕許の黒塗りの丸盆にのせました。

『ありがたう、よつほど快くなりましたの、今もひとりで退屈でたまらなかつたから、起きて手紙でも書かうかと思つた位よ。』

『さう、そりやあよかつてね、でもいゝにまかせて、一時にいろんなことをしちやあいけないわ、寢てゐるのは面倒くさいでせうけれど、そこを我慢してね。』

吉野さんはさういひくお盆の上の小さなコップをとつて、水薬を注ぎました。

『さアめしあがれ、苦くつても眼をつぶつて、ぐつと一息にのみほしておしまひなさいな。』

美代子は半分起き上つて、やつれに見える細い手にコップを受取りました。

八分目ほど注がれた淡黄の液、丁度お酒のやうにみえるのを、ちつと眺めてゐましたが、やがて思ひ切つてぐつと飲みほしました。

『あゝ苦かつた。』

白麻のハンカチーフで、口のあたりを拭ひながら泣きました。

『良薬は口に苦しつていふぢやありませんか、苦いほどよくきくのよ……ゆすいでおきませうね。』

と、吉野さんはコップを手にして立ち上りました。

『すみませんのね、何から何まで……』

『また！ およしなさいよそんなことをいふのは。一つ一つさういはれると、私が何にも出来なくなるぢやありませんか、ね、もうきつといはないこと。ほんとうの姉さんだと思つていらつしやいつて、あんなにいつてるぢやないの。』

『でもねえ。』

『でもどうしたつていふの。』

『……どうもしないのよ。』

『ぢやすぐ歸つてきますからね、おとなしく待つてらつしやいよ。』

と、姉らしい言葉を残して、障子のかげに消えました。

美代子は寢返りうつて、窓の方に顔をむけますと、鶉色のカーテンをとほして、太陽が柔かく頬に流れました。學校の方で誰かの弾いてゐるオルガンの音が、緩くかすかに聞えて来て、快く眠りを誘ひます。美代子は眼をとちて、さま／＼の物思ひに耽りました。

美代子は植物園から歸つた夜、頭がいたいといひだしましたが、大したこともないので、月曜日も火曜日も授業をうけて居ましたけれど、水曜日の午休みに、また例の君子たちに取りまかれて、森田

先生と一しよに歩いた事について、口惜しいことをいはれたので、とうとう倒れてしまひました。

校醫はたいの風邪だといひました。それにあまり頭を使ひすぎたからだらうとのことでしたが、一時は熱も高くて随分心配もしました。併し若い人だけに直りも早く、三日ばかりの間に、もうこんなに快くなつたのでした。その間の吉野さんの看護ぶりは、親身の人も及ばない位でした。

上級生も下級生も、君子等の讒言によつて、譯は知らずたゞ生意氣ものとのみ思ひこんで、美代子に辛くあたるこの頃、たつた一人の同情者なる吉野さんは、美代子にとつてどんなに嬉しくなつたかしい人であつたでせう。教室にあつても運動場にあつても、多くの友

から妬まれ誹られ、たゞ一人寂しく口惜し涙にくれてゐなければならぬ美代子には、この室がたつた一つの隠れ家なのでした。

文藝會も近づいて居ります。美代子は獨唱をする筈になつて居りますので、かうして寝てゐるのは氣が氣でありません。その獨唱も森田先生がお極めになつたので、随分級の人の反感を買ひました。聞くに耐へない罵詈譏を浴びせかけられて、血の出るばかり唇をかみしめたことなど思ひだしますと、また會がすんだ後の噂も思ひやられて、いつそもう何もかも捨てしまひたいやうな氣もするのでした。それにつけても思はるゝのは父様、千ちゃん、優しかつた和歌山の人々、皆どうしてゐるでせう、歸りたい！ と、しみじみ思つて涙がこぼれました。

蜜柑がどんなに美しく色付いたことだらう、千ちやんはお蜜柑が大好きで、お庭の樹は皆千ちやんのものだった。私が學校から歸ると、きつとにこくしなから姉さんあげませうつて、大きなお蜜柑を二つづゝ持つて來たつて。今までは寝るにも起きるにも、どこへ行くにも離れたことがなかつたのに、ひとりぼつちになつてしまつて、どんなに淋しがつてゐることだらう。千ちやんには、他家の子のやうに母様がないんだから、私一人を母とも姉とも力にして居たのに、こんな遠く離れてしまつて、わづかに手紙のやりとりで安否を知るばかり、優しい子だけれども勝氣だから、亂暴な子などに苛められた時、反抗して怪我でもするやうなことはなからうか、薄着して風邪でも引くやうなことはなからうか、など、案じ出せばき

りがなく、病んでは心細いことばかり思はれて、幼ない時別れた母様の面影など、心にゑがいてみるのでした。

過し方のことや行末のことや、現在のこと、和歌山のこと、東京のこと、家のこと、友達のこと、思へば思ふほど胸が痛くなつて、知らずくゝ涙がこみあげてきました。

### 第一七 なぐさめ

美代子は寂しい病室で、さまざまの追想に耽りながら、夜着の襟を噛んですゝり泣いてゐました。

すると、静かに扉があいて、

「おやまあ、どうなすつたの、お苦しいの、え？」  
と、吉野さんは驚いて寄り添うて聲をかけました。美代子はその懐かしい聲をきくと、ありつたけの聲を張りあげて泣きたいやうな氣になりました。

「私、私……。」

と、しやくりあげながら、

「私は何故皆さんに憎まれるのでせう。」  
「まあ何をおつしやるの。」

といひましたが、吉野さんはどきりもしました。今も今洗面室で勝子から、美代子の悪口をさんく聞かされてきたのです。あんまり生意氣だから罰があたつたのよ、ちつとは懲りるがいゝわ、などゝ

いふ酷い言葉をきかされた上、あなたは随分御深切ねえと諷刺をいはれて、口まで出かゝつたいろくの言葉を、ちつとかみしめて歸つてきたところなのです。

「そんなことがあるものですか、あなたが憎まれてゐるなんて……。」

苦しい思ひをして、これだけいひました。

「いゝえ、いゝえ吉野さん、貴女ばかりよ、かうして下さるのは。ね、口惜しいことや悲しいことがあつたら、かくさずにお話なさいつて、親切にいつて下さるのに、今まで隠してゐて御免下さい、私  
はね、吉野さん。」

美代子はまた言葉をついで、



『皆私が足りないからですけれど、でも随分口惜しいことがあつてよ。私はちつとも悪いことをした覚えはないのですけれど……あのね吉野さん、かうなのよ。』

と、美代子は涙を、さめて、テニスコートの事からお休み時間の事まで、落ちなく物がたりしました。

『ですからねえ、私は……』

と、美代子はまた言葉を継いで、

『誰方も恨んぢやをりません、皆私が足りないからなの、さう思つて、修養しよう、強くならうと心がけてゐるんですけれど、時々つい悲しくなつて……』

『まあ！』

吉野さんは深い眠りからさめたやうに、ほつと息をついて、

『まあ、ねえ、ちつとも知らなかつたわ、どんなにく〜苦しいでせう、よくこらへていらつしやるわね。』

と、優しい吉野さんは涙さへ浮べて、美代子の手をとりながら、

『ただどねえ美代子さん、もうすこし御辛抱なさいよ、君子さんたちだつてやはり教育はうけていらつしやるんだから、今にきつと目がさめますよ、あなたのその優しい心が、とほらないつてことはありません、いつかはきつと通る！ それを楽しみに、ね。』

『ありがたう吉野さん、私も然う思つてゐるの。』

『学校もやはり一つの社會ですからね、そりやあいろんなことがあるのよ、私だつて四年の間には、辛いことも悲しいこともいろ〜』

経験しました、あなたの苦しきは充分に察しられてよ……けど、そんなことはサラリと打ちやつてしまつて、暢氣に養生なさらないぢや駄目、文藝會には獨唱するんぢやありませんか、なあにあの人達がなんといつたつて、いゝえ、いはれ、ばいはれる程、しつかりやらなくちやならないわ。』

『えゝ、早く快くなりたいわ。』

『あせつちやいけないわ、起きられる頃は寝てゐて、歩ける頃はすわつてゐるといふ風にすれば、かへつて早く快くなることよ。』

『私の病氣だつてこと、故郷へ知らせて下すつたの？』

『いゝえ、うは言のやうにあなたは、知らせちやいけない、知らせちやいけないつていふんですもの。』

『ありがたう、これんばかりの病氣で、父さまや千ちゃんに、心配かけちやすまないんですもの……あなたにはいろく御心配ばかりかけましたね、そしてこんなにお世話して頂いて、何てお禮いつていゝかわからないわ、ありがたう吉野さん、きつとく忘れません私……。』

ほろりとして吉野さんの手を握りしめますと、吉野さんもかたく握りかへして、

『そんなこといはれると、却つてお恥かしいわ、思つてゐる十分の一もしてあげることができなくて……でもね美代子さん、心だけはね、これでも随分案じてゐるんですから、氣をのんびりさせて、早く快くなつて、文藝會にはまた好い聲をきかせて下さいよ。』

「ええ。」

と、可愛くうなづいて見せました。

第一八 雪國の話

暫くしてから、美代子はふと思ひだしたやうに、

「ね、吉野さん。」

と、よびかけました。

「なあに？」

「あなたいつか、私は北國だつておつしやつたでせう。」

「ええ、それがどうしたの？」

「北の方つて……一體何處？」

「あてゝごらんなさいな。」

「わからないわ……仙臺？」

「いゝえ。」

「青森。」

「いゝえ。」

「ちやあわかつた、秋田だわ、ねえ。」

「いゝえ、ちがつてよ。」

「ちがふ？ ちやあ……。」

と、また考へて、

「さうく、米澤、米澤、でなけりや會津、盛岡、福島、山形……」

「ほゝゝゝさうならべたてちやあ……でも一つもあつちやあなくつてよ。」

「いやよ私はもう、そんなに焦らしちや。」

「海を渡つて行くところ、遠いところ……札幌よ。」

「札幌。あゝ北海道ね。」

「さうよ、私はえぞツ子なの。」

「えぞツ子ですつて？」

「えゝ。北海道のことはね、蝦夷ヶ島根つていふでせう、だからそこで生れた人間はえぞツ子だわ。」

「えぞツ子、えぞツ子、江戸ツ子と語呂か通つてるのね。」

「似て非なるものよ、ほゝゝゝ。」

「ほゝゝゝ紀州ツ子てのはないからつまらないわ。」

「その代り御三家の御城下ぢやありませんか、札幌にはお城なんて薬にしたくも見られない。」

「新開地でせう。」

「御維新になつてから、やうく開けた處なんですもの……その代りバタ臭いことも随分バタ臭いわ。」

「バタ臭いつて？」

「ハイカラなことなの、第一生へてゐる樹からして、そら、ポプラだのアカシアだのエルムだのつて、西洋の臭がするでせう。」

「あゝさうく、札幌にはアカシアの並樹があるつて、いつか聞いたことがあつたわ。アカシアつてどんな樹？ 花が咲いて？」



「咲きますとも。スキートビーに似た白い花がね。六月の末頃は眞盛りで、その頃並樹の下を通ると、甘い香がほのかに鼻をうつて、何ともいへない好い氣持ちよ。朝早く、初夏の風がさわくとふいで、うつすりもやのかつてゐる頃、夜はまた電燈の灯のチラ／＼と輝く時……いつだつていゝんですわ……それから果物ぢや林檎ね、秋の中頃は青い葉と紅い實と、ほんとうにいゝ對照よ。林檎の紅は、柿や蜜柑とはまた異つた色なんですもの。」

「みたいわ私、私は林檎が大好き、水菓子やの店頭に、蒼白いガスの光りに浮きでゝゐる紅玉のやうな林檎、木に實つてゐるところが一度でいゝから見たいわ。」

「あ、紅玉つてば、ほんとにそんな名があるの、あの一番眞紅で

艶のいゝのがさうなのよ。』

『まあ、ほゝゝゝ。』

『ほゝゝゝ。』

『だけどねえ吉野さん、札幌には雪が降るでせう。』

『そりやあ降りますよ、雪の國ですもの……三尺位も積りますよ。ふりだすのは十一月のはじめからで、積るのは十二月の初め、それから一二三と、まあ四月の間は雪に埋もれてしまふの。』

『つまらないわねえ、その間が。』

『えゝ、でもね、つまらないつてばつまらないけれど、また相應に樂しみもあつてよ……西洋間のガラス戸にサラ／＼と粉雪の當る晩、真紅のカーテンのどつしりと重いのをひいて、ストーブの中へ

どん／＼石炭をいれて、かつ／＼と赤い燵のたつを見ながら、長椅子に寝ころんで本をよむなど、南國ではとても味は、れない氣分でせう。』

『あゝ私、そんなお話しいたら札幌へ行つて見たくなつたわ。北海道の冬ときくと、何だかロシアの冬と同じやうな感じがしてよ。』

『さうね、たしかに似通つたところがあるでせうよ。ひゆう／＼と吹雪する晩なんて、あのチャラン／＼といふ櫓の鈴の音をきくと、耐らなく凄くなりますもの。』

『怖ろしい晩もあるでせう。』

『えゝ。北海道はどうしたつて、美代子さんのやうな、柔かい明るい心の人の住む處ぢやないわ。私のやうな冷たいさびしい人間の隠

「れ家なのよ。」

「いやよう、そんなことおつしやつては。」

「だつてほんとうなものですもの、幼さい時から義理の中ではばかり育ちましたからねえ、随分意地つぱりなんですすよ私は、それは、自分でも驚くほど強情な女なの……あなたは南國、私は北國、明るい人と暗い人と、かうして同じ室に暮すつていふのも、考へれば不思議なものねえ。」

「ほんとうにねえ、やつぱりこれが縁といふものね。」

「だから仲よくしませうよ。」

「え。」

二人は顔見合せて、ほゝゑみしました。

「札幌のお話はそれつきり？」

「いゝえ、いゝえ、まだく語りつくせないほどありますよ。博物館の秋の静けさはね……あゝ、あの感じは植物園とよく似てゐますよ、植物園から南國の植物をぬき去つて、もつとく樹も多くして、それも大きなく何千年たつたか解らないやうな木ばかりになると、同じやうなものになります。温室もあるし、池もあるし、水の清い流れがあつて、水鳥が遊んでゐるの、ちひさな舟もあつて乗ることが出来るんですよ。両方から大きな木の葉がおほひかぶさつて、トンネルになつてゐるところなどは、一人ちや怖くて通れません。何しろ、町のまん中にだつて大木があつたり、クローバーが生へてゐるつていふ處ですからねえ。それから農科大學の朝夕だの、

牧場の景色だの、思ひだすとなつかしくつて耐らない時もありますよ。」

「歸りたいとお思ひなさるでせう。」

「歸つたつて、待つてゐるものはお墓ばかりですけれど……それでもやはり歸つてみたいやうな氣のする時もあるの、ほゝゝゝ。」と、笑つて見せましたが、その笑ひはさびしうございました。

「私つてば、よつぽどうつかり者ねえ。」

と、美代子はふと氣が附いて、

「あなた御勉強なさらずなくちやいけなかつたのに……自分が休んでゐるもんで、すつかり忘れちまつてましたの、御免なさいな。」  
「いゝことよ、いゝことよ、構やしないわ、そんなこと。私が自分

勝手にいゝ氣になつておしやべりしてゐるんですもの。えゝすることよ、今つから。宿題の作文を一つ、御飯までに書きあげてしまひますから……すこし我慢して、頂戴な、これでも讀んで、ね。」  
と、机の上からきれいな少女雑誌をとつて、美代子に渡しました。  
美代子は仰向けに寝たまんま、本を胸の上のせて、まづ口繪から見はじめました。

吉野さんは机にむかつて、文を作りはじめました。

太陽のさし方が、よほどすくなくなりました。暮るゝには間もないこととせう、豆腐やのラツバがやかましく聞えて來ます。

第一九 山茶花散る日



玉子さん。

久しぶりであなたにあげる手紙を、床の上でしたゝめやうとは夢にも思つちやありませんでした。私は今病んで居ります。けれど決して御心配下さいませな、たゞほんのちよいと風邪をひいただけなのですから。もう起きてゐたつて、何でもないんですけれど、大事をとつて寝てますの、筆の亂れはそれ故と、あしからずお許し下さいまし。

一週間位かろく病むといふのも、ちよつといゝものですわね玉子さん、天井の木目にも見あき、障子の棧も數へ盡してなどゝいふやうになると、飽きてしまつて厭ですけれど、私は、今日でまだ四日より寝ません。

暖かい太陽のさす午下り、ちつと眼をつぶつて、とほくから響いてくるオルガンの音に、うとくと夢の國へ誘はれてゆく、氣持ちよさつたらありませんの。寮の晝間はそれはく寂としてゐますのよ、寂しいことも随分さびしい、昨日も和歌山が戀しくなつて、さんく泣きましたか……弱いと笑つて下さいませな、私はもう耐らない時があるのですもの。

美しいけれども、刺を持つてゐる薔薇の花、かくれてゐる刺のことには氣がつかず、美しさにひかれてよりそつて、さゝれた時の心持ちは……玉子さん、私はそんな目にもあひましたの。皆、自分が足らないからだと思つても、でもやはり口惜しいわ、のみこんでもく、涙が湧いてまゐります。水に混つた一滴の油、

田舎ものだ〜つて、皆さんから侮られる。先生のおひいきだの、やれごまをするからだの、威張つてゐるの生意氣のつて、東京の方は、そりやあ氣が強いんですよ、思つたことは何でもぐん〜おつしやるんですよ。

教室でも運動場でも、いつも私はひとりぼつち。和歌山のことを思ひだしちやあ泣いてゐますわ。かうして床について、は少しは心細さがまさつて、あなたの事だの袖子さんのことだの、それからそれへと思ひつゞけて、樂しかつた昔の夢を、繪巻物をひもとくやうに、くり返しく〜思つてゐますの。

でもねえ玉子さん、私は決して弱くはならない氣よ、負けたといつちや、和歌山の名折れですもの。どこまでも、誠心をもつて

やりますわ、學課だつて何だつて、一番をとる意氣ごみななの。それにまた、近いうちにある文藝會には、私が獨唱をすることになつてゐますの、そら、あなたのお好きな、あの夢の曲を……。

それからまだ、お知らせすることがありますわ。それはね、いつかもちよつと書いてあげた私と同じ室の吉野さんのことなの、級もお年も私等より二つ上、眞黒なお髪を、いつも飾りツけのない束髪にして、そりやお色の白い、きりつとした御様子の方なの、その方がこんど、私のお姉さまになつて下さつたのよ。口惜しいことも悲しいことも、吉野さんのお膝にすがつて泣きます。幼さい時から父さまもなく母様もなく、義理の中ではかり育つた

つておつしやるけれど、それはくもものやさしい……私のやうなものでも心から可愛がつて、かうして寝てゐますと、お薬のこ  
とから、何から何まで、親身の姉さまのやうにお世話して下さい  
ますの。私は吉野さんがあるばかりに、かなしい中にも、うれし  
く暮してをりますわ。

かくれる袖がなかつたなら、私は我慢しかねたかも知れません。  
勉強の時間をさいては、吉野さんは私にいろんなお話をきかせ  
て下さいますの、昨日も、うす紅の林檎の花咲く北の國のお話を  
伺ひました。吉野さんはあの、銀砂のやうな雪のふる札幌でお生  
れなすつたんですつて。アカシアの樹のことだの、牧場の長閑さ、  
冬の夜の怖ろしさ楽しさ、數へられないほどきかして下さいまし

た。私も和歌山の自慢をしましたのよ、だつて生れ故郷ですもの、  
ねえ。誰だつて自分の故郷ほど好い所はないと思ひますわ。

和歌の浦の秋の夕暮がなつかしい。夕やけの波の色、紅にそま  
つた白帆の美しさ、それにまたあの蜜柑。……屋敷町を通ると  
ズウとついた黄色つばい土塀のくづれかゝつた上から、椿に似  
た緑色の葉がおほひかぶさつて、そしておなじほどの金色の玉が  
星のやうにつらなつてゐる、瓦の上つた小さい門の側によくみる  
けしき。南國の印象は、一生頭からはなれないでせうねえ。

和歌山よ、我がふるさとよ。とこしへに美しくあれ。

何だかとりとめもないことを、あとさきもなくかきつらねまし  
た。あふむけに寝たまんま、胸の上に本をたて、書いたものです

から、かなり疲れました。さぞお読みにくかつたでせう。袖子さん桃代さんには、別にさしあげませんから、どうぞよろしく。風につれて鼓の音がきこえてまゐりますわ。さよなら。

山茶花散る日

寮にて

病める子より

なつかしき玉子様

御もとに

第二〇 郷里の友より

何から書いたらいい、でせう。

久しぶりのお手紙手にして、うれしさにとゞろく胸を、押し、づめ、読み下して、はつと胸を突かれました。

病んでいらつしやる？ 病んでいらつしやる？

まあ、ちつとも知らなかつた。知らないのも無理はない、百里の上を隔て、遠く別れてゐるんですもの。呼べばとて答へはあらぬ、飛んでいつて看護したい思ひは胸一杯ですけれど……

寮の一室に、ひとり、さびしく病む人の上を思ふて、私は涙しました。それにまた……

思ひもよらぬ、悲しいことをききました。辛からうの苦しいだらうのといふ言葉は知つてゐますけれど、私は何にも申しあげませぬ。刺をもつた薔薇の花、おぼろげながら私にも推されます。

たい、強くあれと一言を……ねえ美代子さん、たまの心はあなた、ようくわかつて、下さるわねえ。

吉野さんといふ方のこと、私は心からお羨ましく存じますわ。あなたのためには、心からお嬉しう思ひます。教室ではたつたひとりぼつちでも、寮へ歸ればそのお優しい姉さまがいらつしやる……さう思ふと、私の心もかろくなります。何もかもその方にすがつて、くよくよく考へ事などせず、早く快くなつて下さいましな。

あの、大好きな夢の曲、ほんとにききたいききたい。けれど、かう離れてゐては……

文藝會にはしつかりやつて、皆を見返してあげて頂戴、私もい

のつてをりますわ。

あゝ、何だか、んだか、書くことが一杯あつて、ちつとも出てきやしない。こんな手紙を書いてゐるのなんぞ、焦れつたくつて耐らない氣がしますわ。美さん！ たあちやん！ と、手をきゆうつと握りしめて……など、思つてみたりするのですけれど……駄目ですわねえ、今はもう。

残つてゐる私は、先生もおなじ、お友達もおなじ、毎日きやつきやつと跳ね廻つてゐますけれども、一人でいつたあなたはひとりぼつち、水にまざつた一滴の油といふ文句を、どんなにかなしく讀んだでせう。

やさしいあなたが、容れられないなんて、馬鹿々々しいやうな

気がしますよ。やはり、お出来なさるから妬まれるんだわねえ、林の中でも高い樹は、風の憎みをうけるつていひますもの。でもねえ、美代子さん、私はかへつてその方がいゝと思ひますわ。お互ひに、どんぐりの背くらべはいやなこと、たとへ一寸でも二寸でも、ほかの人より高くなりたいたい。そねまれたつて、ねたまれたつて、それだけはやはり認められますもの。私も首席は、づすまいと思つてをります。お互ひにつとめませうねえ、辛くとも、苦しくとも。

憂きことのなほこの上につもれかし、かぎりある身の力ためさん……この歌の心を持つて……ね。

何だか私、生意氣なとばかりかきましたわねえ、御免遊ばせよ。

私のこの手紙は、もう床の中でお読みなさるやうな事はないでせうよね。ほんの風邪ひいただけだとありましたが、風邪が萬病の基なのですもの、決して、御無理をなさるなよ。

あゝ、さうく、先日千ちゃんにお逢ひいたしました、例の橋のたもとで……。

すこしの間に、おみ大きくおなんなすつて……眼にみえて伸びていらつしやるわね。お遊びにいらつしやいなつていひましたら、ありがたう、姉さんが歸られたら、一しよにお伺ひいたしますつておつしやつてよ。なんて可愛い弟さんでせう、私は抱きしめてあげたいやうな気がしましたわ。

和歌山はまだ暖かですけれど、東京は風が冷たいでせうね。御

體、くれぐれもおいとひなすつて……

まだ御眼にはかゝりませんけれど、吉野さんによろしく申し上げて下さいました。

袖子さん桃代さんには明日學校で……。

さよなら

残れる子より

潮鳴りの高き日

都なる

わが友へ

第二一 その前夜

『美代子さん、あなたあんまり無理をしちやあいけないのよ、本當によくなくなりきれないんだから、ね。』

明日の支度に、白い襟を掛けかへて居た吉野さんは、止めの糸を前齒でブツリと切つて、此方へ向き直りました。

『え、有難う！』

『本當に無理をしないやうにね。』

油つ氣なしのほつれ毛が、見る眼に氣もちの好いほど、ぼつと紅さした頬にかゝるのを、うるさそうに小指に搔き上げながら、小聲に夢の曲を口吟んで居た美代子は、

『私受合つて大丈夫なんですもの、さう心配しないで下さいな。』と、いき／＼した顔を上げました。

『でもねえ、お医者様も無理をしないやうにつて仰つしやつたでせう。』

と、吉野さんは案じ顔に、その清らかな眉をひそめました。

『え、ですけれど明日が心配で、ちつとしちやゐられないんですもの。』

と、美代子は輝く瞳を上げて、につこりしました。

『明日はあなたの大事の日なんですもの、そりやあよく知つてますけれど、たい身體がどうかと思つてねえ。』

『有難う、きつと大丈夫ですよ。』

『でもまあ明日は、しつかりやつて頂戴よ、またみんなから非難されないやうにね、これでお姉さんもなか／＼心配なんですよ。』

と、匂ひやかな美代子の頸を見つめながら、輕口をいつてほゝゑみました。

『一生懸命にやりますわ……お姉さま！』

『はい。』

『あらいや、そんなにちつと私の顔ばかり御覽なすつちやあ。』

『だつてあなたが、あんまり恥かしさうに小さな聲で呼ぶんですもの、もつと威張つて頂戴。』

『ちやあね、お姉さま！』

『はい美ちゃん！ いつまでもそんなに可愛い人で居て下さいよ。』

『え、お姉さま！』

『きつとですね。』



『きつと。』

吉野さんはしんみりとした様子で、眼の瞼を赤くしながら、つと美代子の華奢な手を取つて力をこめ、

『なせあなたのやうに可愛い人が、みんなから憎まれるんでせうねえ、私のやうなもの、狭い袂の下に隠れて、そつと辛い涙を拭いていらつしやる、お郷里のお父様や弟さんがお聞きなすつたら、いゝえ、お亡くなりなすつた母様が御覽なすつて、どんなに悲しいことにお思ひなさるでせう、私はいつでもあなたが私に絶つていらつしやる優しい様子を見ちやあ、そつと涙をこぼして居るんですよ。』

と、長い睫をふせて、ほろりとしました。消燈に間もない寮舎の夜は更けて、時々思ひ出したやうに吹く木

枯は、コト／＼と窓ガラスを鳴らして、火鉢を圍んだ二人の沈黙の耳もとを脅かして行きます。長い廊下を重く引きずるやうに歩いて行く舎監のスリツバの音も遠くなつて、どこの部屋も皆ひつそりとなりました。

『もう遅くなつたから、寝ませうかね。』

眼に當てゝ居た白絹のハンケチをくる／＼と丸めるやうにして、吉野さんはかう美代子に言ひました。

『えゝ。』

微かにうなづいて、赤くなつた眼を見られないやうに、脇にそらして立ち上つた美代子は、窓際近くよつてカーテンをそつと引いて、『まア好いお月夜ですこと、あしたはきつとお天気でせうね。』

と、硝子越しに外面を覗きました。吉野さんも、つと立つて細そりした美代子の肩と並べました。

『本當に寒いやうなお月夜ですね。』

凄（すこ）いほど蒼（あざ）白（しろ）く見える月光（げっこう）は、二人（ふたり）の熱（あつ）した頬（ほ）にさつと流（なが）れまし  
た。一面（いちめん）にぼうつと白（しろ）氣（け）立（た）つた夜（よ）の色（いろ）は、向（むか）ふ側（がは）の竹（たけ）の寮（さう）から洩（も）れ  
る消（き）え残（のこ）つた二（ふた）つ三（み）つの灯（ひ）影（かげ）を、ちようと怪（け）物（ぶつ）の眼（め）のやうに思（おも）はせ  
ます。

『美代子さん！』

『えゝ？』

『明日（あした）はしつかりやつて頂戴（ちやうだい）よ、あなたの大事（だいじ）な晴（は）れの舞臺（ぶたい）なんだ  
からね。』

『やりますわ、一生懸命（いっしょうけんめい）なんですもの。』

と、美代子（みよこ）は腫（は）ればつたい眼（め）に笑（わら）みを見（み）せました。

『さア、もうあんまり遅（おそ）いから寝（ね）ませうよ、どこのお部屋（へや）もみんな  
お休（やす）みなすつたらしいことよ、明日（あした）の朝（あさ）は早（はや）く起（お）きなればならな  
いからね。』

と、吉野（よしの）さんは机（つくえ）の廻（ま）りを取り片（かた）づけにかゝりました。

やがて、友禪（ゆうぜん）メリンスの蒲團（ふとん）に深（ふか）々と顔（かほ）をうづめた美代子（みよこ）は、

『お先（さき）へすみませんのね、まだお休（やす）みなさらないの、お姉（ねえ）さま。』

と、まだ机（つくえ）によつて何（なに）か考（かんが）へて居（ゐ）るらしい吉野（よしの）さんに言（い）ひました。

『えゝ、もう休（やす）みませうね……明日（あした）のあなたのことが案（あん）じられま  
すよ。』

『きつと、きつと大丈夫ですの。』  
と、元氣らしく言つてにつこりしましたが、まだやつれの見える頬のあたりは、何處か淋しい影を見せて居ました。

第二二 文藝會

いよく文藝會も今日といふことになりました。朝のうちばかりかんだやうな鈍い太陽が、冬の物淋しさを思はせて居ましたが、お晝ごろからカラツと晴れ渡つた空に、冷たい風もなく、美しう着飾つた幾百の生徒たちの顔は、喜びに輝いて居ました。  
『どうして？　まだ例の人は見えないやうね。』

『え、まだ出て来ないんでせう。』

『さぞ今日はお得意でせうね、また胸をつき出して威張られることでせうよ。』

『先生もどこがよくて、あんなに御最員になさるんでせう。』

『さういへば、八重子さんはお氣の毒だわね。』

『ほんとにね、今朝も眼を赤くしていらしたわ。』

と、玄關の受付に集まつた四五人が、しきりに美代子の噂に花をさかせて居ました。

『みなさん、そこに入らしつたのね、私今さんぐ方々を捜して来たのよ。』

紫矢緋のお召を二枚重ねて、白い袴をキチンと合せた君子が、濃

い海老茶の袴を胸高にはいて、黒いリボンの付いた飾り靴の音も軽やかに、廊下を駆けて来てその仲間へ割つて入りました。

「さう、私たちは先刻から此處に居たんだすの、君子さん、あなたは会場掛りの方なんでせう。」

「え、忙しくつて困つたわ、だけれど、もう大抵すんちやつたから好いの、こつちはどう？」

「大概いらしつたらしいのよ。可なり大勢來賓があつたわね。」

と、よし子が、うづ高くなつたテーブルの上の招待券を數へながら、

「二百人ばかりよ、一寸盛會だわ、これなら。」と、嬉しさうな顔をしました。

「でもつまらないわ、あの人が出るんですもの、田舎ものに威張ら

れると思ふと、私口惜しくつて堪らないの。」

「私もよ、それに八重子さんが可哀さうなんですもの、今朝も泣いてらつしやつたつてね。」

「え、私も先刻おあひした時、腫れぼつたい眼で、しをくとしでいらしつたんですもの、お氣の毒で、何ていつて御挨拶して好いか解らなかつたわ。」

「京極さんが病氣だからつて、八重子さんに代つた時は、私たちもどんなによろこんだか知れやしないのに、またすぐあの人が出て來たんですもの、憎らしいつたらない。」

「先生はあの人にさせたくて耐らないんでせう、さうしてもし出來が悪ければ、病氣上りですからなんて言ふのよ、よく出來たら尙更